

29-323

白置黙仙老師  
新井石禪老師  
監修

# 禪宗聖典

全

明治  
43. 4. 11  
丙寅

東京一喝社發行



法の本法は無法なり。無法の法も亦法なり。今

無法を付するの時。法々何ぞ曾て法ならん。

(釋迦牟尼佛)

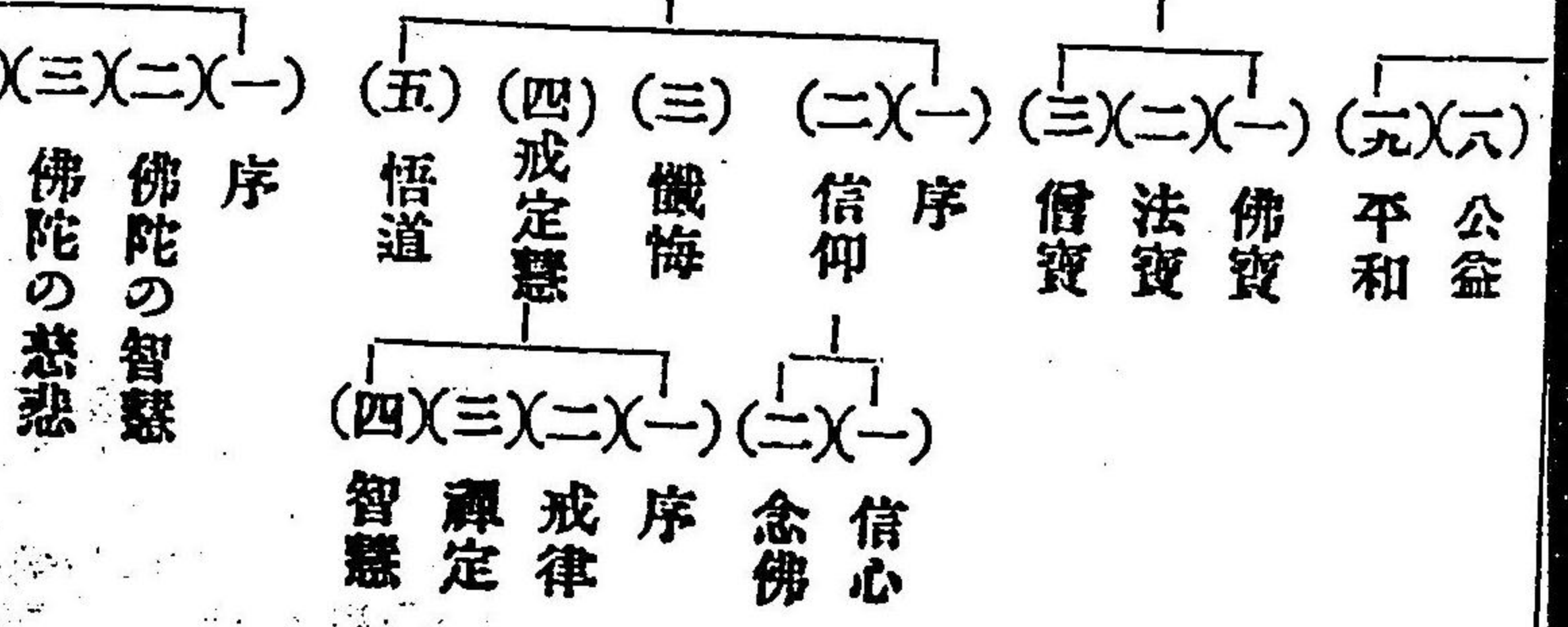
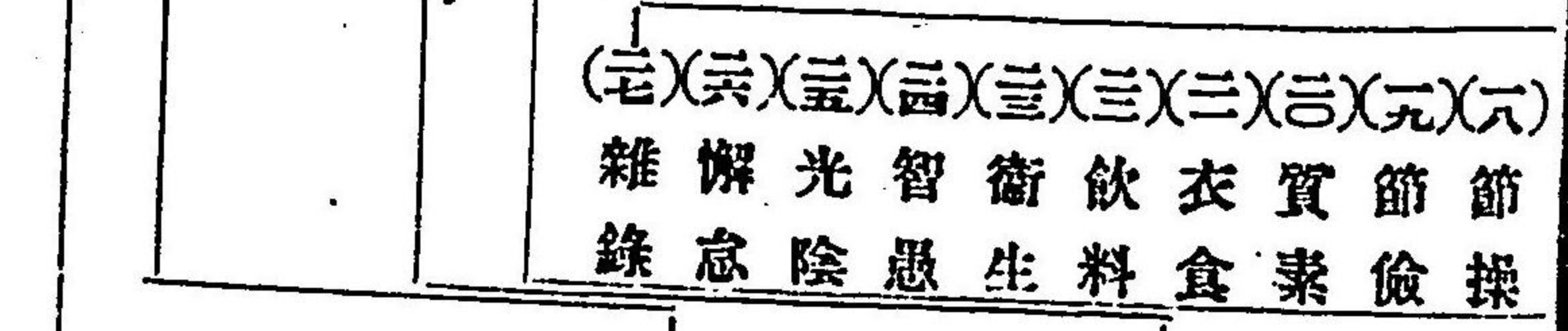
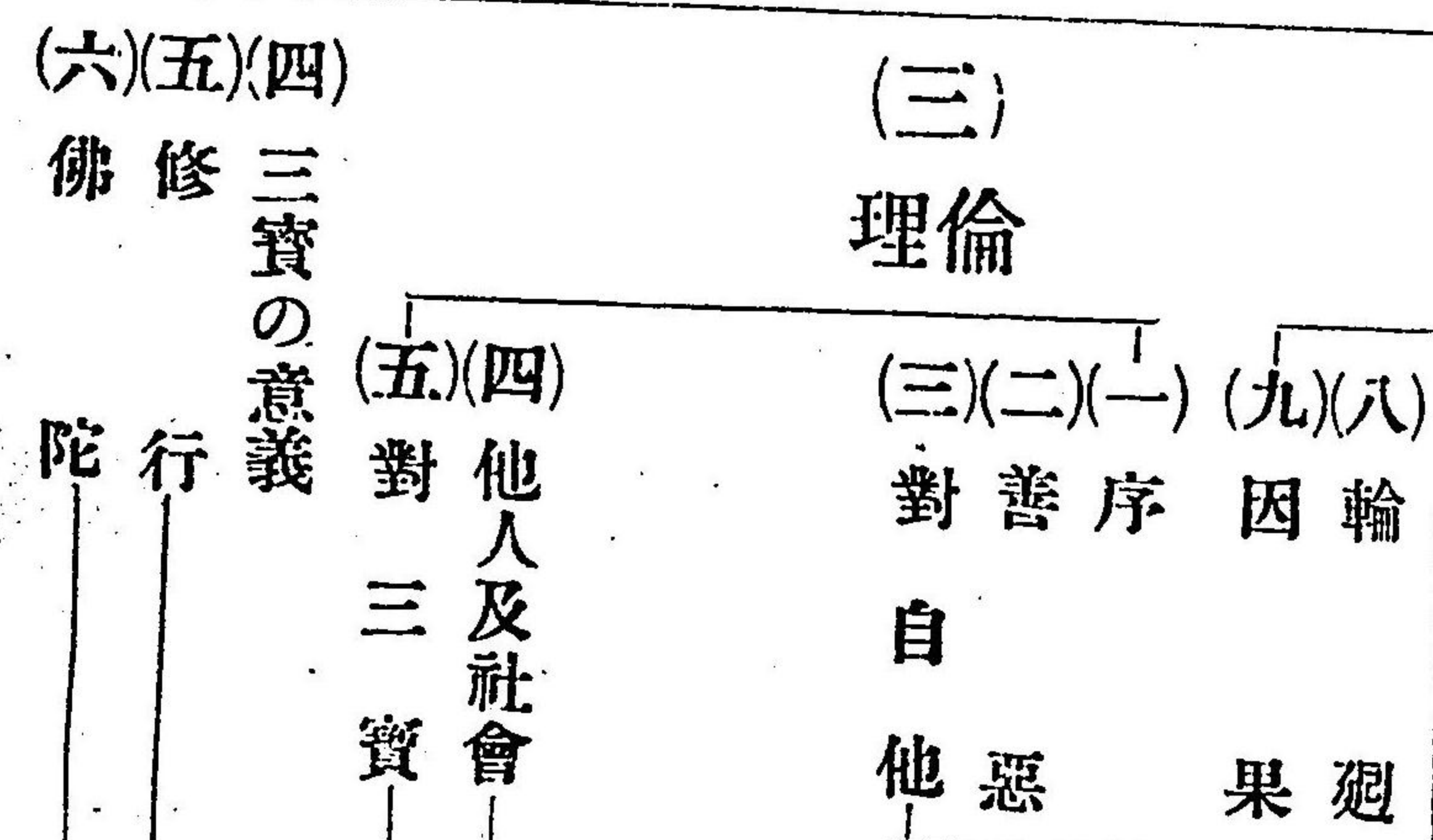
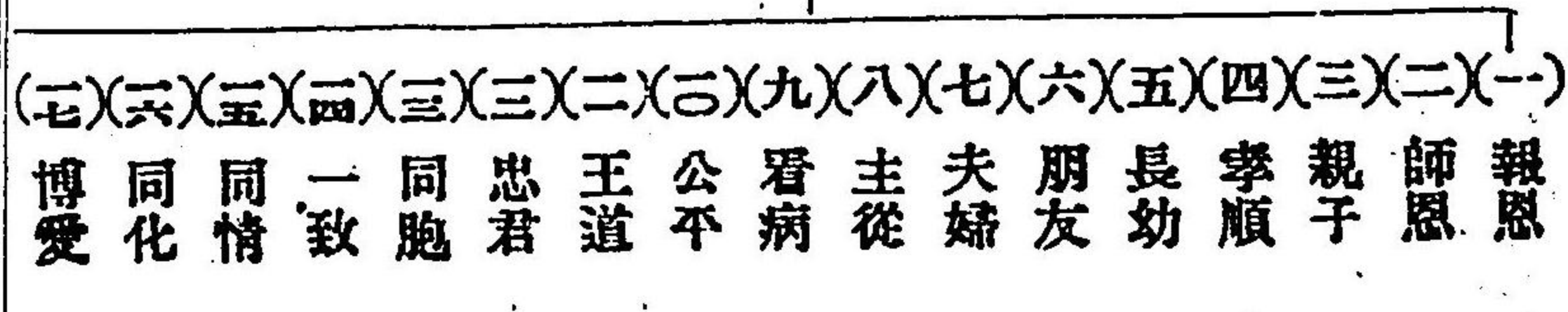
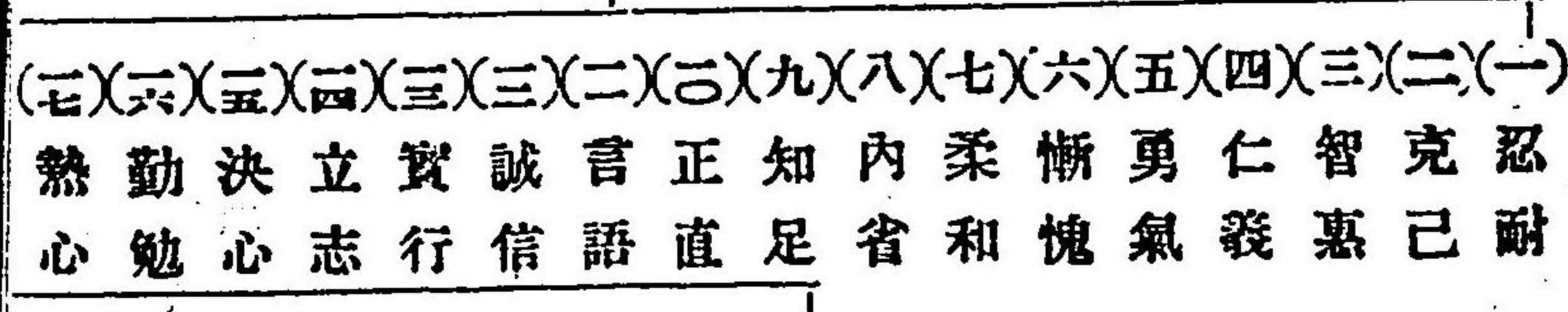
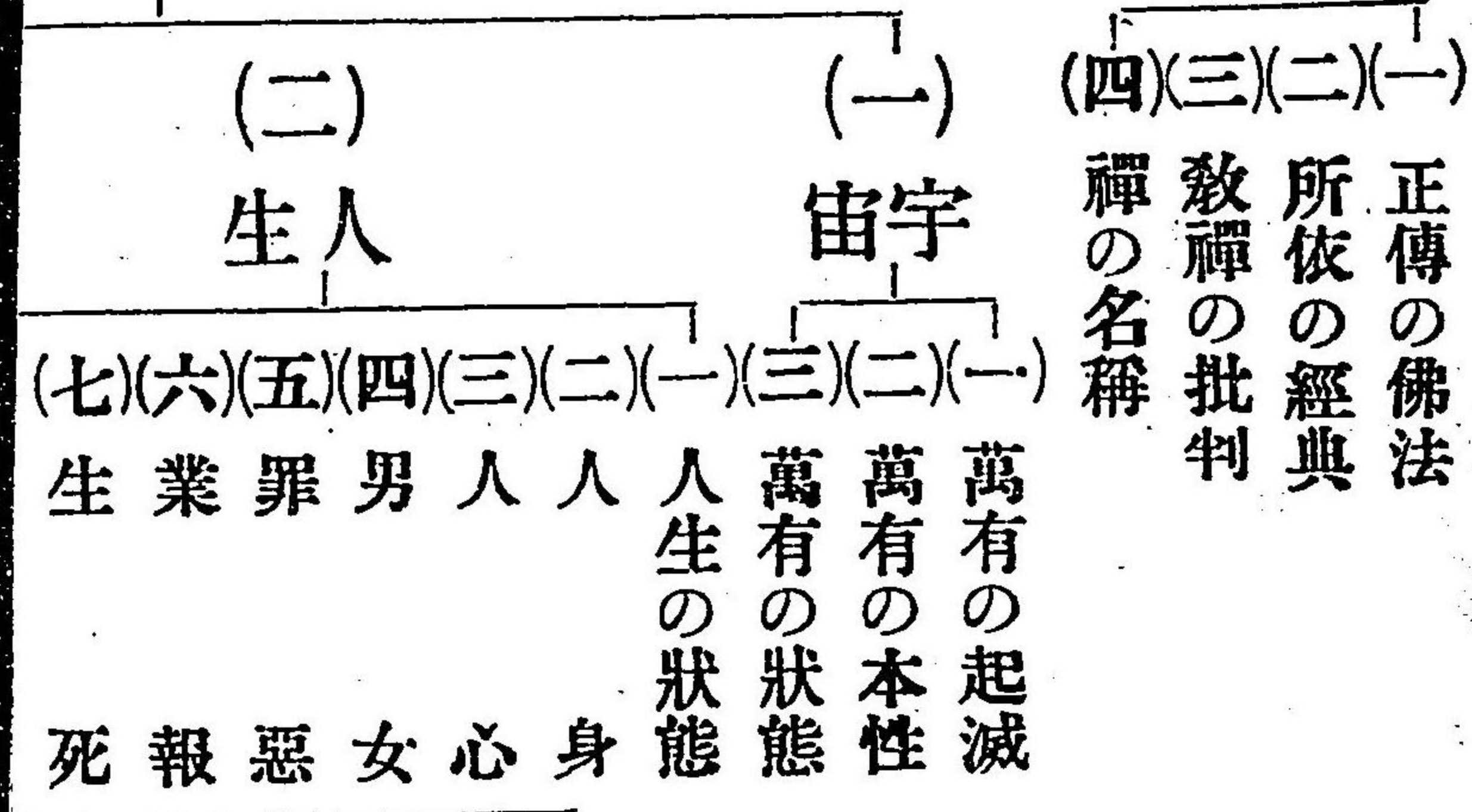
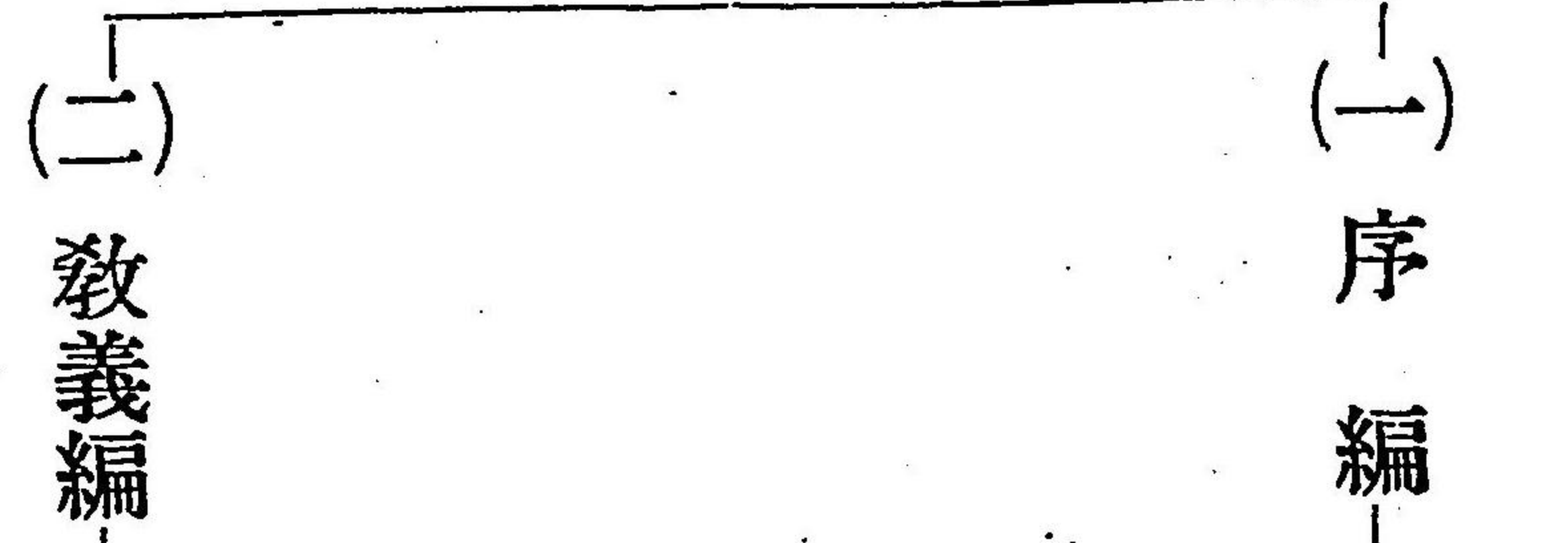
吾本茲土に來り。法を傳て迷情を救ふ。一華五

葉を開き。結果自然に成る。

(達磨大師)



# 聖典圖解





- 一 引用の諸經論は古來より多く禪僧によりて用ゐられたる語句を採れり。正法眼藏とあるは道元禪師の著にして大慧宗杲及其他の正法眼藏に非すと知るべし。
- 一 倫理の分類は順序の前後せると意味の重複せるとの嫌あり、然れども普通倫理の術語を參酌せし分類なれば又止むを得ざることをいす。博愛の次に慈善の項ありしも標題脱失せしを後にて發見したれば止む無く其儘になしぬ。
- 一 佛陀篇の終に佛性あり、これ又顛倒せるの感あれども、前章の人心には主にも差別的の語句を編入せしため佛陀の終に附せり。佛性の項は人心の終に編入する方寧ろ適切ならんか。
- 一 菩提心は修行第一の要心なれども、度衆生の心と解する時は修行の終ならざるべからず、此を以て今は修行篇第一の序の終に編入せり。
- 一 眞髓篇の材料は禪の本領なるだけに甚だ多けれども、其多くは難解の文のみなれば曉り易き一部分を編入せり其他不二平等の教理は擧ぐるに違あらざる也。
- 一 本聖典引用文以外禪に重要なる者多けれども、今は通俗平易を旨としたれば其等を編入せず又文中〇の句讀あるは韻文と知るべし。遠羅天釜を「をんらてんぶ」としたるは誤なり。
- 一 附録の歴史は單に其大勢を示すに止め、五家七宗の教風も又其大要のみを出せり。
- 一 坐禪の方法は、多くの坐禪儀を參酌し、以て大體上に遺漏なからしめんとせり。
- 一 本聖典は學徳深高なる日置默仙、新井石禪の兩老師監修の下に不肖摘翠之を編纂せり由來難解難

(八) 雜 錄  
(七) 眞 髓

(一)	序
(二)	無明と佛陀
(三)	身體と佛陀
(四)	煩惱と菩提
(五)	凡夫と聖人
(六)	本體と作用
(七)	清淨と汚穢
(八)	迷惑と佛陀
(九)	精神と佛陀
(一〇)	佛種と煩惱
(一一)	戒定慧一體
(一二)	三世は一如
(一三)	身體と精神
(一四)	原因と結果
(一五)	教行證一如
(一六)	其他の一如

(五) 佛身の相狀  
(六) 涅槃の意義  
(七) 佛性の意義



入なる禪籍中より平易簡潔なる語句を引用せんとしたれば、未だ充分なりと云ふべからざるも、禪教の始終は之によりて便宜に知るを得べしと信ず。

一表紙の禪装は尾竹々坡氏を煩はし脊の文字は、山田寒山氏の手を経て前田黙風氏を煩はし扉の文字は豊道春海氏を煩はせり、茲に各位の勞を謝す。

明治四十二年十一月下流

岡田宜法識す

# 禪宗聖典

總目錄

## 第壹序篇

### 第一章 正傳の佛法

一一二六

- (一)正傳の功德—破魔の甲冑(二)二教二師なし(三)正法の高深(四)佛心の至極(五)最上乘の佛法(六)相承の宗旨(七)佛法は諸道の極意なり(八)正法と大心(九)大心の意義(一〇)信解の功德(一一)如來の家宅(一二)譬諭(一三)佛陀と大悟(一四)向上の一路(一五)無念の念を念とす(一六)諸惡莫作(一七)佛法の大意(一八)西來の眞意(一九)一字不説(二〇)諸法と佛法(二一)佛教即宇宙(二二)無佛法(二三)教外別傳其一(二四)八宗の大綱(二五)以心傳心其一(二六)其二(二七)教外別傳其二(二八)不立文字其一(二九)方便の文義(三〇)教外別傳其三(三一)人其儘の道理水は冷火は熱(三二)我宗の文字(三三)文字は禪に非ず(三四)文字と見性(三五)本心と禪(三六)身心皆な禪(三七)本有の自性—棒喝の本義(三八)本來宗(三九)本源の清淨心(四〇)本心の智慧(四一)心の完成(四二)昔時の我(四三)禪の宗と體と用(四四)直指と門風(四五)人々具足の法(四六)一心の佛教(四七)心外無法(四八)禪は修證に涉らず(四九)離念清淨(五〇)正法の香(五一)自悟宗(五二)不傳の法(五三)直指に指なし(五四)相傳の意義(五五)心即如來禪(五六)心法を香決せよ(五七)嗣承と偈頌(五八)一字不

總目錄



立(五九)解脱の大道(六〇)禪と武斷(六一)禪は商量に非ず(六二)佛道の正門(六三)身心脱落(六四)常住の禪(六五)不傳の秘訣(六六)正傳の坐禪(六七)禪院の儀式

第二章 所依の經典……………一六一—一三七

(一)序(二)經は閑文字(三)文字と慧命(四)楞伽經の價值(五)楞伽經と所依の意義(六)佛心と佛語(七)教内と教外(八)經卷と禪錄は悟前の要具(九)一切經は指の如し(一〇)經と本心(一一)經論と禪(一二)禪は經法の所詮に非ず(一三)藏經は文字に非ず(一四)教と禪(一五)佛經と禪錄(一六)經論の指導(一七)經綱と禪綱(一八)經論を輕んずる勿れ(一九)經と教(二〇)教と禪(二一)經禪の不二(二二)經卷と如來(二三)經論即ち經論(二四)自己寶藏

第三章 教禪の批判……………三七—六七

(一)批判の標準(二)佛教(三)禪と諸佛教の優劣(四)教禪の別(五)諸宗と禪門(六)教と信縁(七)顯密と禪(八)自家の財寶を運出せよ(九)自得を貴とす(一〇)顯密は閑忘想(一一)教禪の優劣(一二)華嚴と禪(一三)禪は各宗の根本なり(一四)祖意と教意(一五)離文字有文字(一六)教と禪(一七)教禪一致(一八)祖教一致(一九)無二無三(二〇)教に二三なし(二一)一切の教法は同一なり(二二)小乘經(二三)大乘(二四)小乘佛と大乘佛(二五)諸宗の淺深(二六)大乘と最上乘(二七)漸教の價值(二八)十宗の判斷(二九)即心是佛と諸宗(三〇)九家十

宗と一身(三一)法の高下は實行にあり(三二)時代は佛の本證に非ず(三三)頓漸偏圓は同一心なり(三四)經律論は戒を主とす(三五)十二部教と見性(三六)佛教と見性(三七)一切經は心(三八)心の外に教なし(三九)宗門と無門(四〇)禪書の可否(四一)宗旨なし(四二)禪源と藥方(四三)禪宗に南北なし(四四)禪の三宗(四五)五家七宗なし(四六)教禪各宗の判斷(四七)序(四八)五家概評(四九)五家とは其人なり(五〇)五家の宗要は一なり(五一)五家の別風(五二)全提半提の別(五三)宋元の禪風(五四)臨濟曹洞の眞偽(五五)雲門宗と臨濟宗及其弊風(五六)臨濟宗(五七)臨濟と偽仰(五八)四料揀(五九)臨濟偽仰雲門(六〇)偽仰宗の驗(六一)偽仰宗(六二)五家の同別(六三)宗風に高下なし(六四)五家は一相傳のみ(六五)分派は訛謬なり(六六)儒教道教と佛教

第四章 禪宗の名稱……………六七—七二

(一)禪宗の稱なし只佛の正法のみ(二)禪祖、禪和子と稱すべからず(三)宗名の起源(四)禪那は佛法の總要ならず(五)禪宗と魔道(六)古佛祖に禪宗なし(七)達磨宗佛心宗は妄稱なり(八)一定せよ(九)五家の亂稱(一〇)門風の妄稱(一一)七佛の嗣に非ず(一二)狂惑の妄稱(一三)禪宗と正法眼藏(一四)法眼宗(一五)曹洞宗(一六)黃龍派(一七)一心と禪

第貳 教義篇



### 第一章 宇宙

#### 第一節 萬有の起源……………七三—八三

- (一) 萬無有と一心(二) 一念と世界(三) 心と十方(四) 妄心(五) 心の所現(六) 想念(七) 五大
- (八) 萬有無體(九) 如來藏(一〇) 天人一如(一一) 妄心(一二) 心と萬有(一三) 其二(一四) 其三
- (一五) 其四(一六) 其五(一七) 主觀と客觀の干繫(一八) 心の狂亂と妄見(一九) 天地の始終
- (二〇) 萬象と一心(二二) 萬象の主(二三) 起滅(三四) 一切と一心(二四) 三界唯心(二五) 三界
- と三毒(二六) 萬有と心(二七) 因縁其(二八) 其二(二九) 其三(三〇) 其四(三一) 其五(三二)
- 生滅起伏(三三) 法は不生なり(三四) 萬法に自性なし(三五) 其二(三六) 其三(三七) 其四

#### 第二節 萬有の本性……………八三—八九

- (一) 清淨なる宇宙(二) 虛妄の世界(三) 萬有と佛(四) 眞如の法性(五) 世界に迷悟なし(六) 佛
- 性(七) 物我一如(八) 心法一如(九) 佛心と世界(一〇) 其二(一一) 其三(一二) 其四(一三) 萬象
- と心性(一四) 妙理(一五) 自性なし(一六) 唯心と分別(一七) 佛世界(一八) 世界と自性(一九)
- 宇宙の文字(二〇) 山河其儘妙法(二二) 一物萬法を含む(二三) 成佛の道場(二四) 萬法一如
- (二四) 差別と一心(二五) 泥團子

#### 第三節 萬有の狀態……………八九—九四

- (一) 世は常なし(二) 其二(三) 其三(四) 其四(五) 其五(六) 其六(七) 其七(八) 無常(九) 三毒と
- 三界(一〇) 宇宙の組織(一一) 萬有の平等(一二) 有情と無情(一三) 青はこれ青(一四) 無差別
- (一五) 神心爽快

### 第二章 人生

#### 第一節 人生の狀態……………九四—一二六

- (一) 人生の罪惡(二) 衆生の意義(三) 人間の三階級(四) 人生の十二因縁(五) 人と迷惑(六) 六
- 道の衆生(七) 人の大苦惱(八) 人生の十苦(九) 世は水沫の如し(一〇) 悲喜苦樂(一一) 妄想の
- 火(一二) 茫々として死す(一三) 苦多し樂少し(一四) 迷闇と法燈(一五) 造惡の病(一六) 凡夫
- の棲家(一七) 人間界(一八) 悲歎(一九) 喜憂の兩面(二〇) 假の世(二二) 風前の榮華(二三)
- 無常其(二四) 其二(二五) 其三(二六) 其四(二七) 老人と國王との問答—少年と
- 國王との問答(二八) 無明と諸惡德(二九) 佛と衆生(三〇) 人心と世路(三一) 人生二十の難
- (三二) 無常(三三) 盛衰(三四) 火宅(三五) 無常(三六) 人生は幻寄なり(三七) 君臣親子夫妻兄
- 弟の干繫(三八) 電光石火(三九) 人は鳥類に劣る(四〇) 生活(四一) 人間界の六道

#### 第二節 人身……………一一六—一二九

- (一) 生滅の身(二) 人身と佛果(三) 身は空なり(四) 苦たり憐たり(五) 汚穢充滿す(六) 水火相



迫る(七)身は幻なり(八)惡象(九)浮滛の身(一〇)身の惡德(一一)病惱(一二)身惡(一三)身苦(一四)主宰なし(一五)法身と人身(一六)己が醉を知らず(一七)身を思はざれ(一八)身は實あるなし(一九)惡業の身(二〇)身中の六賊(二一)身は化なり(二二)如草露(二三)身は假宿のみ(二四)色身の飢已(二五)居所に赴く身(二六)身中の四毒蛇(二七)善根と身體(二八)人間と四大(二九)人命(三〇)男女貴賤なし(三一)一切の人即ち佛(三二)其二(三三)身心と妙心

第三節 人心

一二九—一五九

(一)序(二)序 (三)四種の心—眞と頼耶と體別なりと云は惡慧なり(四)善惡は縁より成る(五)心は人に左右せらる(六)いやながら與ふる心(七)心意識の區別(八)其二(九)氣海と丹田(一〇)理と性(一一)性と人畜(一二)性と心—心と理と氣(一三)人の氣と氣の源—脈—死と氣—過失の生ずる理由—氣は惡、心は善—氣と血と性の干繋(一四)識(一五)意(一六)情(一七)性より起る二種の作用(一八)凡心の種類と自由(一九)心と念起、旅客と亭主(二〇)人心の六道(二一)六道の境界は心の所現なり(二二)自心の賊(二三)善惡の情緒(二四)淨心と妄心(二五)一心のメダギ(二六)心に地獄極樂なし(二七)佛教と見心—方角を失ふ(二八)佛と人の本地(二九)月と雲、佛性と妄念(三〇)主心(三一)心の二面—生滅の心—不變の心(三二)凡聖の宅(三三)入道の要津(三四)心の善惡(三五)猿猴、畫師、僮僕(三六)惡

の源(三七)心は猿猴の如し(三八)慮知心と菩提心(三九)心より浮沈す(四〇)錯覺(四一)心識(四二)心の作用—觀心と清潔(四三)心は空なり(四四)心に憎愛なし(四五)本心(四六)即心是佛の鵝呑み(四七)人心は印板の如し(四八)正念の價值(四九)心體と生滅(五〇)是心即佛(五一)如來の徳相(五二)心と道(五三)光明(五四)佛性(五五)至妙の心(五六)心外無佛(五七)心の體用(五八)無心と見性(五九)心外無佛(六〇)神、佛、天、如來は同一心なり(六一)佛の家(六二)道義の本(六三)心大膽小(六四)修業と賢愚

第四節 男女

一五九—一六六

(一)婦人は地獄の小使なり(二)婦人の七科(三)婦徳(四)女子と男子—悟の意味(五)女子悟道の實例(六)男女等一(七)得法と人物(八)其二(九)其三(一〇)婦人に對する態度(一一)女人を嫌ふ勿れ(一二)其二(一三)婦女の辨道(一四)男女の性別あるなし(一五)男女同一の覺鉢(一六)變成男子(一七)婦人の悟道

第五節 罪惡

一六六—一八七

(一)諸法の根源(二)煩惱の根源と意識(三)其二(四)罪源と迷情(五)迷の源と情識(六)無明と情識(七)無明(八)煩惱(九)罪と心(一〇)福と苦(一一)煩惱と心(一二)獄卒の告(一三)心と善惡(一四)心は猿の如し(一五)罪過己を滅す(一六)同(一七)小惡(一八)過罪(一九)十善



十惡(二〇)縛(二一)寃業(二二)四寃(二三)煩惱を以て煩惱を治めよ(二四)三毒(二五)三毒と地獄(二六)諸苦の本(二七)慳貪(二八)貪(二九)同(三〇)同(三一)慳貪(三二)身中の四毒(三三)怒(三四)大怒(三五)瞋恚(三六)瞋(三七)其二(三八)其三(三九)其四(四〇)忿(四一)瞋(四二)八大地獄—八萬の障門(四三)瞋(四四)其二(四五)其二—根本無明と支末無明(四六)憍慢(四七)我慢(四八)慢心(四九)詔曲(五〇)憍伐(五一)欲、食、財、色(五二)殺生(五三)女色と殺生(五四)殺生と佛種(五五)殺生の六義(五六)盜の四種(五七)殺生と父母(五八)殺生の十罪(五九)偷心(六〇)姪(六一)愛(六二)苦樂愛憎(六三)多欲(六四)禍福(六五)放逸

第六節 業報

一八七—二〇四

(一)三時の業感(二)因果必然(三)正像末の果報(四)自業自得(五)業の本源(六)業の本源と佛性(七)身口意の三業と相續(八)業の根本と情識及解脱法(九)業は秤の如し(一〇)業は迷より發す(一一)業と心識(一二)業と如來(一三)無明と業—業と貴賤(一四)邪見の輩(一五)順現業(一六)順次業(一七)順後受次業(一八)邪見と業感(一九)三時業(二〇)業感相續(二一)業感(二二)惡業惡感(二三)善業善感(二四)善惡兩感(二五)心の給齒と業報(二六)心業(二七)業報(二八)本心と業(二九)惡業免れ難し(三〇)善惡業感(三一)業感の相續(三二)妄業(三三)畜生に墮する十業(三四)精神作用と業感(三五)定業(三六)定業と不定業(三七)

七)善惡の定業(三八)業消滅と祈願(三九)罪業の消滅(四〇)業力と保任(四一)長命の十業(四二)醜を招く十業

第七節 生死

二〇四—二二二

(一)序(二)生死を懼れよ(三)生死と愛(四)我と生死(五)心を明めよ(六)識神(七)生死事大(八)生死は思惑なり(九)生死と性情(一〇)生死の二字を討究せよ(一一)生死の長短(一二)生死と五塵(一三)死生もと空なり(一四)死に對する警告(一五)生死は悲喜するに足らず(一六)生死を知らず(一七)生死は言詮を絶す(一八)生死の外に佛なし(一九)生死は佛の御命なり(二〇)成佛の捷徑(二一)生死は涅槃なり(二二)生死は除くべきにあらず

第八節 輪廻

二二二—二二七

(一)輪廻と愛(二)善惡(三)妄想と輪廻(四)佛性と輪廻(五)法我(六)輪廻の根本(七)輪廻の苦痛(八)一日の輪廻(九)輪廻の主體(一〇)生死と人身(一一)三毒と輪廻—六識—六賊

第九節 因果

二二七—二二七

(一)種子と果實(二)自己と因果(三)因小に果大なり(四)過去と現在(五)修養上の因果(六)因果の干繫は一世に止らず(七)生殺の感應(八)上の善は下の善なり—今世と來世の因果



(九)修行と因果(一〇)善惡の因に善惡の果あり(一一)參禪と因果(一二)外道(一三)佛道と因果の理(一四)聲響相順ふ(一五)滴水も海と成る(一六)世の快樂と罪業の原因(一七)春秋と過去現在(一八)其(一九)其(二〇)覺悟と因果(二一)惡因惡果(二二)因果を知るの捷徑(二三)惡因を遠離せよ(二四)聲響相應す(二五)阿鼻地獄(二六)因果撥無(二七)感應(二八)中有と因果(二九)因果撥無のところが(三〇)其(二)

附録 畜類……………二二七—二二八

(一)佛と畜類(二)其(三)其(四)其四

第三章 倫理

第一節 序……………二二八—二三七

(一)道德とは何ぞ(二)道德と尊美(三)衆を樂しましむ(四)言行は治身の大本なり(五)陰徳の陽報(六)人情と規矩禮法(七)教の本末(八)道、師、父母(九)人心と明鑑(一〇)眞の道人(一一)厚きは豊かに長きは竭ます(一二)教、順、諂、諛、知、愚(一三)道德と權勢(一四)心行正しければ戒禪を要せず(一五)一善行の價値(一六)三十年座せよ(一七)道德の方劑(一八)道德と權勢(一九)忠と孝

第二節 善 惡……………二三七—二四〇

(一)善惡(二)白品と黒品(三)一善一惡(四)一善心の勢力(五)至善の行爲(六)善惡と動機(七)善惡の効果

第三節 自己に對する道德

第一項 忍 耐……………二四〇—二四三

(一)忍(二)忍の五徳(三)忍耐を守る以前の覺悟(四)慈忍の十利益(五)安宅(六)忍と障害(七)堅忍(八)福の源(九)衆生忍(一〇)信と堅忍(一一)順を忍べ(一二)忍に惡なし

第二項 克 己……………二四四—二四七

(一)實徳(二)懸命(三)表裏なし(四)睡眠を食る勿れ(五)克己の價値(六)克己と養心(七)克己の四事

第三項 智 恵……………二四七—二四八

(一)智慧と心の垢(二)智慧は身中の寶なり(三)智慧は船なり(四)智慧と勤勉(五)智慧の力

第四項 仁 義……………二四八—二四九



(一)仁義禮樂等の意義(二)仁義(三)仁(四)義

第五項 勇氣……………二四九—二五一

(一)勇氣(二)勇氣と道果(三)勇氣と工夫

第六項 慚愧……………二五一

(一)慚愧(二)慚愧の服

第七項 柔和……………二五二—二五三

(一)柔和其一(二)柔和其二

第八項 内省……………二五二—二五六

(一)内省其一(二)内省其二(三)内省其三(四)内省其四(五)改過と遷善

第九項 知足……………二五三—二五五

(一)少欲知足其一(二)知足其二(三)少欲知足其三(四)赤貧の樂(五)草屋も學堂に勝る

第十項 正直……………二五五—二五九

(一)正直の語(二)正直と天宮(三)正直と忠臣(四)直心と菩薩(五)質直と諂曲(六)妙法と直心(七)正直と明神(八)正直の意義(九)直心と悟道—其分に隨て修す

第十一項 言語……………二五九—二六六

(一)謹言其一(二)謹言其二(三)言語と意志(四)言語と人物(五)言行を三思すべし(六)多言する勿れ(七)言語(八)言語三思すべし(九)眞の言行(一〇)公德と言語(一一)親言(一二)愛語(一三)人を督ると勿れ(一四)諍ふと勿れ(一五)妄語(一六)綺語(一七)惡口(一八)兩舌其一(一九)兩舌其二(二〇)誠實其一(二二)其二(二三)他人の過罪を云ふ勿れ(二四)愛語利行

第十二項 誠信……………二六六—二六七

(一)誠と儒佛(二)誠信其一(三)其二

第十三項 實行……………二六七—二六八

(一)實行せよ(二)一丈を説かんより一尺を行せよ(三)實行其二(四)慎行

第十四項 立志……………二六九—二七一

(一)立志其一(二)其二(三)其三(四)其四(五)立志と悟道(六)専心一意



第十五項 決心……………二七一—二七二

(一)決心其一(二)其二(三)其三(四)決意(五)究鼠猫を咬む

第十六項 勤勉……………二七二—二七六

(一)勤勉と坐禪其一(二)勤勉其二—大熱病に坐禪す(三)勤勉其三—蚊軍と戦ふ—身體を割き足を折る—喧嘩に省悟す(四)勤勉其四(五)勤勉其五(六)勤勉其六(七)勤勉其七(八)勤勉其八(九)勤めざる心を患へよ(一〇)高きを究めよ

第十七項 熱心……………二七七—二八〇

(一)熱心其一(二)熱心其二(三)熱心其三

第十八項 節操……………二八〇—二八二

(一)丈夫の心(二)梅花(三)愛慾其一(四)姪慾(五)愛慾其二(六)不放逸其一(七)不放逸其二(八)愛慾其三(九)愛慾其四(一〇)情欲(一一)財色(一二)色欲

第十九項 節儉……………二八二—二八三

(一)節儉と入道(二)節儉實用(三)節儉其一(四)美服と垢衣(五)節儉其二(六)節儉其三

第二十項 質素……………二八四

(一)質素其一(二)質素其二

第二十一項 衣食……………二四八—二八九

(一)衣食住と道徳(二)食事上の注意(三)美食に耽げざれ(四)食物の由来を思ふべし(五)服薬の如くせよ(六)多食の害(七)食を擇ぶな(八)不時に食せざれ(九)多食せざれ(一〇)間食せざる利益(一一)食は赤子の肉を食む如くせよ(一二)菜の撰擇(一三)料理と清潔

第二十二項 飲料……………二八九—二九二

(一)酒の害其一(二)其二(三)其三(四)其四(五)其五(六)其六(七)其七(八)姪酒(九)酒の害其八(一〇)喫煙

第二十三項 衛生……………二九二—二九四

(一)澡浴と香油(二)洗淨すべきもの(三)垢衣舊衣(四)長爪ならざれ(五)淨髪(六)食事(七)威儀を整へよ(八)便を洗除せよ

第二十四項 智愚……………二九四—二九七



(一)君子と小人其一(二)其二(三)其三(四)智愚と身心(五)智愚と道(六)走るは一にして其意は違ふ(七)愚人に道を語るべからず(八)乳と毒(九)智愚と求道(一〇)智者と愚者との二種(一一)道德と權勢(一二)賢愚と實行

第廿五項 光陰……………二九七—三〇〇

(一)光陰(二)光陰其二(三)其三(四)其四(五)其五(六)其六(七)其七(八)其八(九)其九(一〇)其十

第廿六項 懈怠……………三〇一—三〇二

(一)懈怠其一(二)其二(三)其三(四)其四(五)其五(六)其六

第廿七項 雜 錄……………三〇一—三〇五

(一)雅量(二)自信(三)中庸(四)才と徳(五)中庸(六)謹慎(七)實あれ(八)才能の害(九)斷食の意義(一〇)徳の三重

第四節 他人及社會に對する道德

第一項 報 恩……………三〇五—三〇六

(一)四恩(二)病雀尙恩を報ず(三)報恩(四)蛇恩を報ず(五)蛇恩を報ず(六)報恩と君子の風容

第二項 師 恩……………三〇七—三二二

(一)師恩其一(二)其二(三)師友(四)材と工師(五)世恩と法恩(六)宗師(七)師、親の恩(八)明師(九)明師と利益(一〇)悟中の迷(一一)磨跡を驗せよ(一二)師承(一三)眞知識

第三項 親 子……………三二二—三二三

(一)親子(二)親密(三)互助(四)父子

第四項 孝 順……………三二三—三二八

(一)孝行の種類(二)孝の大義(三)三學と孝(四)孝行(五)孝心と佛心(六)親の恩其一(七)親(八)親の恩其二(九)孝行(一〇)孝と戒(一一)孝と三教(一二)親子(一三)戒と孝(一四)消極的の忠孝

第五項 長 幼……………三二八

(一)長幼(二)長上



第六項 朋友

（一）友と摺擇（二）友義（三）良友（四）惡友（五）善友とは何ぞ（六）友義（七）自然の師友（八）善友（九）友誼（一〇）朋友の種類

第七項 夫婦

（一）婦の守るべき五事（二）夫の婦に對する五事（三）婦女の心得

第八項 主從

（一）主人と善惡（二）君臣と四支（三）主恩（四）聖主と賢臣（五）君臣其一（六）其二（七）沙汰は緩なるべし

第九項 看病

（一）看病と福田（二）看病の五徳（三）看病の六失（四）師の看病に付ての心得十二件

第十項 公平

（一）菩薩の極愛（二）自利々他（三）公平其一（四）其二

第十一項 王道

（一）主君の徳義其一（二）其二（三）王道其一（四）其二

第十二項 忠君

（一）國王（二）國王恩（三）忠と孝（四）君恩其一（五）其二（六）君父の恩義（七）忠君其一（八）其二（九）忠言（一〇）忠の意義—忠臣の家庭—忠と平和（一一）大忠（一二）武士と忠孝の本義（一三）武士の國家と報恩（一四）武士道（一五）賢臣

第十三項 同胞

（一）四海同胞（二）萬物一根（三）四海兄弟

第十四項 一致

（一）協同（二）王民一體

第十五項 同情

（一）衆人の心を心とす（二）いさかひ（三）他人の非を説くべからず（四）同情（五）一視同仁と佛子（六）同情と無畏施（七）同情と不殺生（八）其二

第十六項 同化



(一)同化其一(二)其二(三)其三(四)布施と同化

**第十七項 博愛**.....三四三—三五一

(一)布施と三昧(二)博愛其一(三)其二(四)其三(五)利他と佛道(六)慈悲の如來(七)慈悲は天地の如し(八)慈悲の十八功德(九)大悲の徳(一〇)衆生を赤子とす(一一)慈悲の心と佛(一二)布施と不誚(一三)慈悲(一四)慈悲の殺生(一五)布施其一(一六)其二(一七)其三(一八)愛語(一九)効果なき慈悲

**第十八項 公益**.....三五二—三五三

(一)公益(二)治生産業(三)布施其一(四)其二(五)利行

**第十九項 平和**.....三五三—三五六

(一)平和—病は善智識なり(二)太平(三)平和其二(四)佛法と平和(五)平和其三

**第五節 三寶に對する道徳**

**第一項 序**.....三五六—三六一

(一)三寶に従はざるの失敗(二)三歸依の態度(三)三歸依の感應(四)三寶の功德(五)三歸と

佛弟子(六)三歸の効果(七)三寶と佛子の修業(八)三寶供養法(九)三寶と出苦(一〇)三寶は一體なり(一一)三寶と自己(一二)三歸と解脱(一三)三歸と成佛

**第二項 佛寶**.....三六一—三六二

(一)供養の効果其一(二)其二(三)供養と貧賤(四)供養の効果其三

**第三項 法寶**.....三六二—三六三

(一)經卷と如來(二)經と修行の標準(三)法は最も勝る(四)不惜身命(五)其二(六)其三(七)供養の効果

**第四項 僧寶**.....三六三—三六五

(一)出家と累徳(二)其二(三)祖恩其一(四)其二(五)其三(六)其四

**第四章 三寶の意義**.....三六五—三七二

(一)三寶とは何ぞ(二)三寶三種の功德(三)一體三寶(四)現前三寶(五)住持三寶(六)三寶の六義(七)一難得(八)二無垢(九)三威徳(一〇)四莊嚴(一一)五勝妙(一二)六不改異(一三)結尾(一四)解脱と三寶(一五)三寶の本義(一六)三寶と我と正歸依の理



第五章 修行

第一節 序……………三七二—三九八

(一)世法にも佛法にも關せざれ—任運自然—退步就己(二)時を知るべし(三)心城と戒律を守れ—行思相應(四)初心工夫の注意事項(五)眞個の修業—見性と神通(六)在家修行と三心三修(七)理入と行入(八)濁水を澄しめよ(九)世事を放棄せよ(一〇)修行の三方法(一一)禪と戒(一二)疑と定心(一三)心頭に佛なし(一四)行ふと難し(一五)物は微なるに防げ(一六)時と奮勵(一七)學道と勇氣(一八)佛種と佛法—辨道と修行(一九)不修を怖るべし(二〇)修行の規則を知れ(二一)得る所堅ければ失ふ所亦難し(二二)佛祖の要訣(二三)無修の修(二四)佛法の爲に佛法を修すべし(二五)細究せよ(二六)參禪と勇猛(二七)參禪に秘訣なし(二八)參禪と利智(二九)心性を明かにすべし(三〇)身心を捨つべし(三一)身心脱落(三二)佛心を究めよ(三三)自己に參せよ(三四)直に見よ(三五)參禪は病を知るべし(三六)參禪の四用心—第一心を立てよ(三七)志を專一にせよ(三八)舊見を棄つべし(三九)新智識に泥む勿れ(四〇)疑と工夫(四一)疑は工夫の種なり(四二)疑の凝結を貴ぶ(四三)用心の十種(四四)病は修養の一助なり(四五)其本を固ふせよ(四六)心城を守れ(四七)用心(四八)研究—耳得、見得、心得(四九)練心と長命不老其一(五〇)其二(五一)其三(五二)菩提心とは度衆生也(五三)眞の菩提心(五四)菩提心の意義其一(五五)其二(五六)衆生の導手(五七)發心の意義(五八)發心と黃金(五九)佛の掟

第二節 信仰

第一項 信心……………三九八—四一四

(一)誠と感應(二)信者と不信者—二種の信者(三)信心と得道(四)佛道を信するは自己を信するなり(五)信と迷根(六)大信を起すべし(七)信仰と動物(八)無心の難易と信仰(九)信と本来自己の發見(一〇)信仰力と成佛(一一)信仰と悟(一二)信心ある人は誠なり(一三)信なきは牛馬也(一四)信と誠(一五)信と諸道德(一六)聖教と信心(一七)正信と正智(一八)仁義忠孝と信(一九)信と自由の諸德義(二〇)信と善法(二一)信の手と徳の寶(二二)大疑と大信(二三)信と實相(二四)五種の正信(二五)信無きは佛法の器に非ず(二六)信仰の十利(二七)信と利鈍(二八)信と解脱(二九)信と業(三〇)信と輪廻(三一)信根(三二)誓願(三三)譬喩(三四)無信者(三五)信と徳

第二項 念佛……………四一四—四二七

(一)念佛の意義(二)念佛と滅業(三)念佛と惡念(四)念佛と坐禪(五)他佛は自佛也(六)自身と淨土(七)念佛と持戒(八)念佛は參禪に益あり(九)中下根と念佛(一〇)見性と淨土(一一)念佛は誰ぞ(一二)念を忘れずんば淨土に入らん(一三)異名同體(一四)習禪と念佛(一五)心



と淨土(二六)自性と彌陀(二七)彌陀と說法(二八)極樂(一九)安養世界(二〇)心を淨ふせよ  
 (二二)禪に往生を妨げず(二三)淨土(二三)彌陀(二四)彌陀其二(二五)歸趣と淨土(二六)彌  
 陀と本性(二七)一彈指に往生す(二八)分別心と淨土(二九)無心と極樂(三〇)心と淨土(三  
 一)苦樂と淨土

第三節 懺悔

四二七—四三四

(一)懺悔の意義(二)懺悔と衆過(三)三歸と懺悔(四)根本業と懺悔(五)三業懺悔(六)罪根と  
 懺悔(七)聲聞と菩薩—懺悔の可能(八)慚愧と懺悔(九)悔れば清淨也(一〇)懺悔の五不放逸  
 (一一)實相と懺悔(一二)滅罪と懺悔(一三)懺悔と三歸(一四)懺悔と佛(一五)懺悔と諸佛  
 (一六)三時業と懺悔(一七)懺悔の諸德(一八)多惡は一善に及ばず(一九)十戒と懺悔(二〇)  
 犯戒と懺悔の有無

第四節 戒定慧三學の意義

第一項 序

四三四—四四一

(一)三學と佛典(二)三學の意義(三)三學の主客と先後(四)佛道の大綱(五)妙心と三學(六)  
 坐禪(七)三學と人心(八)鼎の如し(九)三學の大事(一〇)定慧等用(一一)定慧を本とす—定  
 慧と體用(一二)定慧と父母(一三)持戒と定慧(一四)三學相資(一五)戒を先とす(一六)自性

に固有の戒定慧

第二項 戒律

四四一—四六一

(一)序(二)佛教と戒律(三)戒は人の病より作る(四)正傳戒(五)菩薩戒と聲聞戒(六)大小乘  
 戒(七)佛戒(八)自性清淨戒(九)禪戒と諸家(一〇)戒の語義(一一)三師と諸戒(一二)三皈戒  
 とは何ぞ(一三)戒法の順次(一四)不殺生と戒(一五)戒は入道の基(一六)三聚淨戒と佛教  
 (一七)三聚淨戒の効力(一八)三聚淨戒と佛の三德(一九)攝律儀戒(二〇)攝善法戒(二一)攝  
 衆生戒(二二)不殺生戒(二三)不食婬戒(二四)不偷盜戒(二五)不妄語戒—身心妄語(二六)不  
 酤酒戒(二七)不說過戒(二八)不毀毀自他戒(二九)不慳法財戒(三〇)不曠恚戒(三一)不謗三  
 寶戒(三二)不殺生(三三)不偷盜(三四)不婬欲(三五)不妄語(三六)不飲酒(三七)普遍的の授  
 戒(三八)授戒と非人(三九)授戒の先後(四〇)護戒(四一)學道の用心(四二)佛祖の行履(四  
 三)持戒と歡喜(四四)持戒は見性なり(四五)持犯なし(四六)入門と受戒(四七)持戒其一(四  
 八)懈怠と本戒(四九)持戒其二(五〇)戒は一切の根本也(五一)萬善の基(五二)福と孝と戒  
 (五三)生死と戒法(五四)戒源(五五)戒心(五六)戒體(五七)破戒と迷(五八)破戒(五九)三乘  
 の念と破戒(六〇)乘と戒との緩急

第三項 禪定

四六一—四九〇



(一) 禪と定との意義(二) 禪定と聖智(三) 坐禪と生死(四) 坐禪と公案(五) 正印(六) 要機(七) 正門(八) 聖凡の位を出づ(九) 坐のみ坐禪に非ず(一〇) 工夫現前(一一) 事の爲すべき無し(一二) 坐禪と如來の三昧(一三) 坐禪と如來の居處(一四) 禪の本體(一五) 禪と生死—禪の骨自(一六) 安樂の法門(一七) 禪とは何ぞ—思惟の二種(一八) 定と斷惑(一九) 慧は禪より生ず(二〇) 禪は一心の異名也(二一) 諸佛が證せし三昧(二二) 定相の五義(二三) 寂靜湛然(二四) 安樂の法門(二五) 禪は難易の法に非ず(二六) 外道禪との差別(二七) 諸宗の禪と異なる點(二八) 禪の種類其(一)(二)(三) 其二(三)(三)(三) 無禪の禪(三) 大乘と心乘—數息(三) 疑と參禪(三四) 一切皆禪(三五) 坐禪と深山(三六) 禪寂と悠樂(三七) 禪定と諸門—無心定—不思議定—眞如三昧法性三昧(三八) 結跏と半跏(三九) 大尊貴生(四〇) 佛祖の辨道(四一) 坐法(四二) 坐禪工夫の方法(四三) 參禪の要路(四四) 工夫と無心(四五) 眠も佛心なり(四六) 工夫と坐禪(四七) 壁に倚る勿れ(四八) 閉眼と閉目と足の變交(四九) 日用の用心(五〇) 坐禪の要術(五一) 調息法(五二) 入定と出定(五三) 坐禪に就ての十事(五四) 參禪と坐禪及注意(五五) 禪定の功德(五六) 諸行と坐禪(五七) 眞の參禪(五八) 一時の佛—生の佛(五九) 無益の坐(六〇) 坐と如來の境界(六一) 坐禪の十利益(六二) 無明と坐禪(六三) 出堂法と入堂法—經行(六四) 手を組む方法(六五) 經行の五法(六六) 病氣と坐禪其(一)(六七) 其二(六八) 坐禪と勤勉其(一)(六九) 其二(七〇) 坐禪と在家其(一)(七一) 其二(七二) 坐禪の利害

第四項 智慧

四九〇—四九四

(一) 智慧の能力其(一)(二) 其二(三) 心性と智慧(四) 智慧と佛性(五) 世智と出世間の智(六) 三學六度と智慧(七) 智慧と冤軍(八) 禪と智慧其(一)(九) 其二(一〇) 其三—寂と照(一一) 其四(一二) 大智と大愚(一三) 智と鍊心

第五節 悟道

四九四—五一八

(一) 悟の意義(二) 實悟(三) 妄想の滅亡(四) 小悟と大悟(五) 無事昇平(六) 虛明自照(七) 凡聖皆除く(八) 大悟の妙用(九) 悟りても行道せよ(一〇) 悟道の概況(一一) 悟は思議すべからず(一二) 悟界(一三) 無生死(一四) 無念と大悟(一五) 悟と男女(一六) 別事なし(一七) 貧富快樂と大悟(一八) 證と悟の別(一九) 物自ら閑なり(二〇) 徹悟と見性(二一) 悉く本來の人(二二) 無事閑散(二三) 天眼通(二四) 三耳通(二五) 他心通(二六) 宿命通(二七) 飛行自在通(二八) 漏盡通(二九) 見性成佛(三〇) 見性と輪廻(三一) 本心(三二) 物見えず(三三) 生ながら身なし(三四) 見性(三五) 不悟者も大悟す(三六) 無師獨悟(三七) 大悟と却迷(三八) 佛と衆生の大悟(三九) 迷と悟(四〇) 坐禪と悟—證上の修(四一) 解脱の諸義(四二) 屋宅なり(四三) 無波濤(四四) 無作の樂(四五) 解脱其(一)(四六) 解脱其(二)(四七) 解脱と見性(四八) 正覺(四九) 無我と解脱(五〇) 迷と悟其(一)(五一) 罪惡と迷悟(五二) 病藥と迷悟(五三) 離縛と解脱(五四) 禪なく



道無し(五五)解脱と如来(五六)山は是山(五七)悟上の修(五八)疑惑と大悟其一(五九)其二(六〇)修と悟(六一)眞の修證

### 第四章 佛陀

第一節 序.....五二八—五三三

(一)佛の意義(二)解脱と如来(三)生死の二念なきを佛と云ふ(四)佛陀如来(五)心佛(六)サツパリシタ佛(七)佛の異名(八)佛が教法の二面(九)佛の本體(一〇)佛心(一一)佛と道其一(一二)其二(一三)佛の境界(一四)佛の方便(一五)佛の言語其一(一六)如来の室と衣と座(一七)佛の壽命(一八)佛の言語其二(一九)佛の世界(二〇)如来の説法(二一)佛恩(二二)世尊の意義(二三)佛と生死其一(二四)佛と生死其二(二五)佛は自心也(二六)佛心本性(二七)佛と心(二八)其二(二九)佛性と衆生性(三〇)其三(三一)迷へば衆生悟れば佛(三二)人々天真佛(三三)麻三斤(三四)古佛心其一(三五)佛心(三六)諸佛(三七)佛境界(三八)古佛心其二(三九)佛國土其一(四〇)其二(四一)其三(四二)佛陀の行狀其一(四三)其二

第二節 佛陀の智慧.....五三三—五三七

(一)平等無二(二)自心と佛智(三)不思議智(四)大醫王の如し(五)不動の智慧(六)佛の智覺(七)増減なし(八)佛の十大智(九)無碍智(一〇)人間の智と佛智

### 第三節 佛陀の慈悲

五三七—五四二

(一)佛と衆生(二)自ら慈悲を知らず(三)最大の愛(四)無愛憎(五)一視同仁(六)大慈を本とす(七)佛性と如来(八)母の如し(九)佛は壽を分ち玉ふ(一〇)解脱せしむ(一一)慈父(一二)佛出世の意義(一三)慈悲の輕重(一四)佛の慈愛と父母の愛(一五)慈悲の藏經

### 第四節 佛陀の救濟

五四二—五四八

(一)釋尊の大願(二)誠と善(三)信心と救濟(四)佛の出現(五)同源一體の理(六)無邊の生死(七)佛の開教の次第(八)衆生の苦を苦とす(九)三界と救濟(一〇)應身佛の救濟(一一)女現身其一(一二)其二(一三)佛の慈憫

### 第五節 佛身の相狀

五四八—五五八

(一)法身と色身(二)法身は萬物に現す(三)佛の三身其一(四)佛眼(五)古佛の心(六)不去不來(七)法身の相好(八)身相は相に非ず(九)金剛の身(一〇)佛の三身其二(一一)淨身法(一二)法身(一三)佛の相好(一四)佛に經戒善惡なし(一五)法身と色身(一六)佛と本心及體用(一七)五種の法身(一八)佛の五眼(一九)行道と法身

### 第六節 涅槃の意義

五五八—五六三



(一)涅槃とは何ぞ(二)生死と涅槃(三)寂滅を樂と爲す(四)心相滅(五)第一の法(六)妄想滅  
 其二(七)涅槃の近因(八)涅槃の相(九)涅槃は不死なり(一〇)涅槃に義あらず(一一)妄想滅  
 其二(一二)涅槃の八味(一三)慈悲と涅槃(一四)涅槃の樂(一五)無名と涅槃(一六)佛祖の住  
 所(一七)生死と涅槃(一八)涅槃は去來なし(一九)三界の心(二〇)生死と涅槃海(二一)無煩  
 惱

第七節 佛性の意義……………五六四—五六五

(一)佛性の二義(二)悉有佛性(三)佛性と無常(四)佛性と涅槃(五)人と佛性(六)生死と佛性  
 (七)生死と佛性と無佛性(八)無佛性と成佛

第七章 精髓

第一節 序……………五六六—五七二

(一)一切皆平等(二)差別即平等の理(三)不二に就くの注意(四)眞爲超絶(五)甘中に苦あり  
 (六)一切不二(七)清淨と破戒とを論ぜず(八)法界平等(九)動靜不二(一〇)道心を要す(一  
 一)一切空華の如し(一二)小乗と大乘(一三)佛堂に佛なし

第二節 無明と佛陀……………五七二—五七三

(一)無明と佛陀

第三節 身鉢と佛陀……………五七三—五七五

(一)佛性の作用(二)常成佛と已成佛(三)凡夫と佛

第四節 煩惱と菩提……………五七五—五八〇

(一)煩惱即菩提(二)煩惱即佛(三)煩惱と涅槃(四)清淨と破戒(五)迷悟不二(六)無明と解脱  
 (七)迷悟を分たす(八)念起と本心(九)業識と佛性(一〇)念慮と人佛(一一)塗柿と柿餅(一  
 二)迷人なく悟法なし

第五節 凡夫と聖人……………五八〇—五八三

(一)凡聖不二(二)生佛不二(三)月と曇(四)眞の佛子(五)自心に參せよ(六)法に差別なし  
 (七)佛は衆生の用

第六節 本鉢と作用……………五八三—五八四

(一)體用不二

第七節 清淨と汚穢……………五八四—五八五



(一)佛國と地獄(二)淨穢不二(三)其二  
**第八節 迷惑と佛陀**……………五八五—五八七  
 (一)三毒と佛陀(二)生死と涅槃(三)惑智不二(四)其二(五)無明と本覺の性  
**第九節 精神と佛陀**……………五八七—五九一  
 (一)心外無法(二)即心是佛の方便(三)心外に佛なし(四)衆生と佛(五)佛性と迷情(六)砂は飯とならず(七)本來佛(八)心佛不二  
**第十節 佛種と煩惱**……………五九一—五九二  
 (一)佛種と煩惱  
**第十一節 戒定慧一躰**……………五九二—五九四  
 (一)戒定慧の體は一なり(二)我に閑家具なし  
**第十二節 三世は一如**……………五九四—五九五  
 (一)三世の有無(二)三世は一なり

**第十三節 身體と精神**……………五九五—五九六  
 (一)身心一如其一(二)其二(三)其三  
**第十四節 原因と結果**……………五九六—五九七  
 (一)因果不二(二)定力と變化—大器晚成  
**第十五節 教行證一如**……………五九七—五九八  
 (一)教と行と證との一致(二)修證一如(三)本證妙修  
**第十六節 其他の一如**……………五九八—六〇〇  
 (一)色空同一(二)自他不二(三)有無不二(四)常と無常(五)心境一如  
**第八章 雜篇**……………六〇〇—六二五

(一)徹底(二)如何せば佛道に通達せん(三)四方十萬億土の意義(四)心は何處に置くべきか  
 (五)無念とは何ぞ(六)佛祖の用心(七)淺間しき智者の病氣(八)三種の神通(九)無執著と實  
 悟(一〇)病を得るの十原因(一一)悟と往來(一二)離言の道(一三)美惡の念慮(一四)無性の



禪(一五)禪僧の行狀見解(一六)人間の四病毒(一七)安眠の原因(一八)初心の坐禪(一九)佛となる方法(二〇)身心脱落(二一)真正の見解を要す(二二)大機大用とは何ぞ(二三)世のありさま(二四)信と疑と悟(二五)法を聞くに三種の法あり(二六)佛を發見する方法(二七)俗事と佛事(二八)道人とは何ぞ(二九)學道の三要件(三〇)道とは如何(三一)獸類の愛(三二)自律的救濟(三三)生死自在(三四)用心とは何ぞ(三五)戒定慧及悲願(三六)念佛と彌陀(三七)謙遜と沈黙(三八)惡智識の害(三九)佛法に二三なし(四〇)直に實行せよ(四一)嗜好の優劣(四二)六波羅密(四三)佛道と自己(四四)佛法

### 附録

## 第一篇 三國禪宗史綱

### 印度之部

### 第一章 釋尊以前に於ける禪の遠流

一一八

(一)序説(二)禪宗史最初の問題(三)吠陀成立の二學説(四)吠陀の分類(五)アーラニヤカハの語義(六)吠陀の末葉(七)優婆尼沙土の語義(八)六派哲學(九)ヨガの語原と六度、八正道

### 第二章 禪の起源

八一—一三

(一)境域の影響(二)釋尊と禪の起源(三)禪尊と戒定慧其一(四)釋尊と戒定慧其二

### 第三章 以心傳心の起源

一三一—一六

(一)以心傳心の意義(二)以心傳心の起源

### 第四章 印度の禪系統

一六一—二六

(一)第二傳(二)第三傳(三)第四傳(四)第五傳(五)第六傳乃至第二十八傳(六)菩提多羅の智辯—世寶と法寶—達磨の名稱(七)南天竺に於ける布教時代の達磨(八)六宗破碎の達磨(九)異見王の排佛—異見王と達磨の會見(一〇)達磨支那に向ふ

### 支那之部

### 第一章 教禪混淆時代の禪風(第一期)

二七一—三二

(一)支那最古の文物と佛教(二)先秦以後前漢末に至る狀況—前漢末葉に佛書發見せらる(三)東漢時代の教風—支那佛教の起源—沙門、寺院、譯經の始—四十二章經の譯出

### 第二章 教禪混淆時代の禪風(第二期)

三二一—四一



(一)時代區劃(二)後漢末の翻譯狀況—禪經典の翻譯(三)三國時代の教風—戒律傳來の始—  
 講經の始(四)西晉時代の教風—支那密教の嚆矢(五)西晉の終より姚秦前の教風—阿毗曇宗  
 の嚆矢(六)姚秦時代の教風—維摩經の講演—勅葬の始—淨土の開教—羅什の渡來と佛教の  
 第一變(七)戒律大に備る—禪經典の翻譯—江東禪風の素地(八)結尾

**第三章 教禪混淆時代の禪風(第三期)……………四一—四六**

(一)時代區劃(二)劉宋時代の教風—禪寺あるの始—五門禪要法の譯出(三)齊朝時代の教風  
 —寶誌禪師の出世(四)梁初達磨以前の教風(五)東西呼應の時期

**第四章 正傳禪風時代……………四七**

**第一節 達磨西來以後元朝に至る時代區劃……………四七—四八**

(一)支那朝廷の變遷と時代別

**第二節 達磨西來以後隋末に至る禪風……………四八—五六**

(一)達磨以前の禪風(二)達磨愈々西來す(三)嵩山接化の達磨—慧可雪中に臂を斷つ—達磨  
 最後の說法(四)達磨以後隋朝以前の禪風—支那佛教の第二變(五)隋朝時代の禪風

**第三節 唐朝時代の禪風……………五六—七二**

(一)唐代佛教の總括(二)初唐の禪風(三)道信禪師下の分裂(四)牛頭禪の系統(五)牛頭禪と  
 傳教(六)黃梅山上の傳法(七)北宗禪の分裂(八)南北兩禪の異點(九)當時の名僧(一〇)盛唐  
 時代の禪風(一一)正傳系の二分裂—盛唐の高僧(一二)中唐時代の師家—當時の高僧(一三)  
 晚唐時代の禪風—當時の高僧—五家七宗分裂の圖(一四)潯山警策、傳心法要、寶鏡三昧(一  
 五)其他當代の師家(一六)結尾

**第四節 唐朝以後宋代の禪風……………七三—八七**

(一)時代區劃(二)唐末五代の禪風—續寶林傳、一宗の難(三)雲門宗法眼宗の分裂(四)宋代  
 の佛教(五)宋代の禪風—宗鏡錄、萬善同皈集、宋高僧傳出づ(六)禪風の變化(七)廣燈錄、祖  
 英集—輔教編、傳法正宗記、正宗論出づ(八)外部の思想(九)臨濟系の二分分裂(一〇)宋  
 の哲宗前後三十年間の禪風—當代の禪書(雲門錄、祖庭事苑、續燈錄、禪苑清規、林間  
 錄、禪林僧寶傳、石門文字禪、護法論、臨濟錄、等)—當時の高僧—信心銘拈古、無盡燈記  
 (一一)碧巖集、宗門統要—大慧禪師の開教—圓悟禪師—天童小參錄出づ—默照禪と看話禪  
 の起源—翻譯名義集出づ—僧寶正續傳、羅湖野錄、宏智廣錄出づ(一二)禪門寶訓、東山外  
 集、東山語錄—榮西禪師來る(一三)叢林公論、同盛事、從容錄、普燈錄、大慧普說、破菴  
 語錄—道元禪師來る—祖燈錄、從容錄出づ(一四)無門關、如淨語錄、人天寶鑑出づ、聖一  
 國師來る(一五)大光明藏、禪門宗要出づ—蘭道溪隆日本に渡る(一六)法燈國師來る—正宗



贊出づ—徹通義价、南浦紹明來る

第五節 元朝時代の禪風……………八七—九三

(一)元朝に於ける禪風の概括(二)元代の禪風—佛祖統記成る(三)日本圓覺寺派の分裂—蓮宗寶鑑出づ(四)禪林類聚成る—備用清規、幻住清規、禪居集—日本方廣寺派の分裂—勅修清規、釋氏稽古略、佛祖通載出づ—護法論、六學僧傳出づ

第六節 明朝以後の禪風……………九三—九七

(一)明代の禪風—頓悟入道要路門—道餘錄、續傳燈錄—飯元直指集—尙直篇—正理篇—禪宗正脈—宗門正燈錄(二)續高僧傳、禪家龜鑑、指月錄—明高僧傳、東坡禪喜集—宗門玄鑑圖、禪關策進、竹窓三筆(三)分燈錄—釋迦譜、佛祖綱目、續釋氏稽古略(四)結尾(五)清朝—五燈嚴燈

日本之部

第一章 鎌倉以前に於ける禪の傳來……………九八—一〇〇

(一)道昭の禪—道瑤と北宗禪—傳教と牛頭禪—義空の禪—慈覺の禪—覺阿と楊岐禪—能忍と楊岐禪(二)日本禪の起元ならざる理由

第二章 鎌倉時代の禪風……………一〇〇—一〇一

第一節 臨濟宗の開立……………一〇一—一〇九

(一)榮西と黃龍系派の禪—建仁寺派—興禪護國論—教禪混清(二)圓爾辨圓—南禪寺派の祖—建長寺派の祖—永源寺派の祖(三)心地覺心入宋—兀菴來る(四)大休正念來る—圓覺寺派の祖(五)圓光禪師(六)一山—寧來る(七)月林、道隱、虎關(八)通翁と當時の佛教—當時の高僧(九)宗峰妙超—大徳寺派の祖—雪村、清拙、楚俊(一〇)楚俊後の禪風

第二節 曹洞宗の開立……………一〇九—一一六

(一)道元禪師の出世—能光と洞山—日本に正統禪あるの始—正統禪と曹洞宗(二)正統禪最初の經典—曹洞宗の開立—永平寺成る、其門下(三)瑩山禪師の出世—總持寺成る(四)明峰及峩山の門下—總持寺の五派(五)東明慧日來る(六)經家、義雲、寒岩、大智—寒岩派(七)寂圓派(八)結尾

第三節 當代に於ける禪風の異點……………一一七—一一九

(一)榮西と公卿禪(二)道元と地方(三)鎌倉の武家禪—曹洞發展の理由(四)臨曹の混清

第三章 室町時代に於ける禪風の發展……………一一九



第一節 臨濟宗の發展……………一一九—一二七

(一)南浦紹明の出世—妙心寺派の起源(二)夢窓楚石の出世—天龍寺派の起源—其門下(三)義堂絶海の著述(四)春屋妙葩の出世—相圓寺派の起源(五)無文元選の飯朝—方廣寺派の起源—佛通寺派の起源—當代の人物(六)當代の著述(七)雪江と妙心四派—一休和尚—當時の著述(八)東山前後の著述(九)天文以降の著述

第二節 曹洞宗の發展……………一二七—一三七

(一)明峰派と峩山派—東陵永瑛來る(二)太源派—開本の門下(三)如中の門下(四)通幻派(五)無端派(六)寶峰派(七)大徹派(八)源翁下(九)了菴下(一〇)石屋下(一一)一經下(一二)普濟下(一三)不見下(一四)天真下(一五)天鷹下(一六)天徳下(一七)量外下(一八)芳庵下(一九)明峰派(二〇)寒岩派(二一)結尾

第三節 當代禪學の貢獻と禪風の變遷……………一三七—一四一

(一)江戸幕府成立以前の狀況(二)五山の變更(三)五山禪僧の貢獻(四)鎌倉時代の禪風と當代の禪風—南朝禪と北朝禪—曹洞禪と各地方—曹洞禪の傳播せる理由

第四章 江戸時代の禪風……………一四一—一四二

(一)江戸幕府成立以前の世狀—時代區劃

第一節 臨濟宗の禪風……………一四二—一四八

(一)崇傳と徳川の施政—金地院の職責—諸法度と崇傳(二)澤菴禪師の出世—澤菴の手腕—嶺南愚堂の出世—一絲禪師と著書(三)當代の高僧(四)古月禪師と古月派—其門下—古月派下の著述(五)白隱禪師と鶴林派—白隱の著書—其門下—東嶺和尚の著書と門下—遂翁禪師の門下(六)峩山門下—隱山下(七)卓州禪師の門下

第二節 曹洞宗の禪風……………一四八—一五八

(一)徳川と曹洞宗—關三刹—關府六ヶ寺(二)本山の改立(三)關三刹の横暴—關三刹と總持寺—轉衣道場の確立(四)寺院の階級(五)一宗中心の移動—兩本山の騷擾—當代各派の人物—徳川寺家制の弊害—一宗腐敗の極點—宗門復古の氣運(六)月舟禪師の出世(七)卍山禪師の出世—卍山の門下(八)卍山と同志の提携—宗門復古成る—復古に關する著書—天桂、獨菴の著述(九)心越禪師來る—水戸黃門と心越(一〇)指月禪師の出世—指月の著書—本光禪師の著書—面山禪師の出世—面山の著書(一一)徳川時代の高僧—千丈玄樓の著書

第三節 黃檗宗の開立……………一五八—一六四

(一)隱元禪師の來朝日本黃檗宗の起源—隱元の門下—隱元禪師の著書(二)隱元下の三派



(三)木菴派—黃檗禪師の東漸—木菴の著述—潮音の著述(四)高泉禪師と其著述—高泉の門下(五)即非派—即非の著述(六)獨湛と念佛—龍溪禪師(七)當代の諸高僧(八)注意事項の二件

第四節 普化禪宗の成立……………一六四—一六八

(一)普化宗の祖—普化禪師の四打(二)法燈國師と本宗—普化宗徒の始—虛無僧の始(三)徳川と普化宗—普化宗の開立—一宗墮落の原因—宗派別—相承の次第(四)禪宗との別

第五節 徳川と禪宗の裏面……………一六八—一七一

(一)徳川と武家佛教の利用(二)徳川と禪風の俗化(三)臨濟禪の興廢と時代(四)曹洞禪中心の移動(五)徳川と禪風の悲觀

第五章 明治以後宗政の變遷……………一七一—一七八

(一)廢佛毀釋の裏面—當時僧侶の狀況(二)教部省成る—教導職—大教院の設置—伽藍法の廢止(三)禪三宗の合同—三宗の分離(四)當時の各宗本山(五)曹洞宗務院の成立—社寺局—兩本山の争擾(六)各宗管長と職權—曹洞宗の教育機關—宗憲發布(七)明治の禪宗各派—日露戰役後の禪風(八)明治以降の碩徳—現代禪門の碩徳

第二篇 禪宗各派の異風

第一章 總論……………一七九—一八二

(一)禪の本領—宗派の區別—教風と方便(二)宗教と宗祖—各佛教と宗祖—禪宗の主なる宗派—各派に對する注意

第二章 牛頭禪……………一八二—一八八

(一)牛頭禪の祖師—行住座臥總て佛法—三百の僧を一手に養ふ—春風百韻を吹く—牛頭の世代(二)道欽禪師と馬祖—烏鵲和尚—和尚と白居易(三)崇慧の詩趣(四)牛頭と傳教(五)牛頭禪と曹洞滂仰

第三章 北宗禪……………一八九—一九一

(一)五祖下の兩雄—得法偈の意味—人間の實際(二)五祖と神秀(三)得法後の神秀—其門下—北宗禪と傳教—北宗禪不振の理由

第四章 南宗禪……………一九二—一九四

(一)蘆行者—心機愈熟す—得法偈の意義(二)五祖と慧能(三)五祖と六祖下の禪



第五章 五家七宗區別の標準……………一九五—一九六

(一)七宗とは何ぞ(二)分派の時期—宗祖の家風と標準

第六章 曹洞宗……………一九六—二〇六

(一)曹洞の名稱(二)遠祖と元祖—曹洞系の獨立(三)洞山の小傳—得法の偽—主なる門下—日本傳來の洞山下の三流(四)洞山の家風(五)曹洞下の接化法(六)五位の配別(七)正中偏(八)偏中正(九)正中來(一〇)偏中至(一一)出發點と到着點(一二)兼中到(一三)結語

第七章 雲門宗……………二〇六—二二二

(一)雲門出世の年代—雲門と趙州(二)雲門宗と法眼宗(四)單刀直入(五)雲門の答話(六)關の一字(七)理論的頭腦(八)雲門の施設(九)雲門と睦州及石頭(一〇)雲門の門葉

第八章 法眼宗……………二二二—二二九

(一)文益禪師小傳—宗名の由來(二)法眼の接衆(三)丙丁童子來求火(四)本宗と他の宗派(五)六相義—萬法唯識(六)法眼の門下(七)結尾

第九章 臨濟宗……………二二九—二三八

(一)六祖下の二流(二)義玄禪師小傳—初參の義玄—大愚と義玄—悟後の義玄—義玄其師を

打つ(三)臨濟宗の法系(四)臨濟の機鋒—一喝の内容(五)辛辣と横暴(六)臨濟の愛涙(七)四料揀

第十章 馮仰宗……………二二八—二三四

(一)宗名の由來(二)馮山禪師小傳(三)仰山と其門葉(四)馮山摘茶の話(五)萬境一時に來る(六)本宗と他の宗風(七)三種生(八)本宗の表裏(九)結尾

第十一章 黃龍派……………二三四—二三八

(一)宗名の宗來(二)慧南禪師小傳—當時の人物(三)門下と日本の臨濟(四)黃龍派と臨濟(五)黃龍の接衆(六)黃龍と黃檗及臨濟

第十二章 楊岐派……………二三八—二四三

(一)方會禪師小傳(二)楊岐山以後の方會禪師(三)楊岐の禪風(四)楊岐の洒脫(五)門下の禪風(六)後代の楊岐禪(七)楊岐系と日本臨濟(八)結尾

第十三章 默照禪と看話禪……………二四三—二五六

(一)兩禪の起源(二)默照禪の誤解(三)眞箇の默照禪—第二義(四)外面の看話禪(五)眞箇の



看話禪(六)兩禪の一致(七)兩禪の末流

第三篇 通俗坐禪儀…坐禪の方法……………二五七—二七二

- (一)宇宙と一心、佛と人(二)坐禪は閑家具なり(三)無繩自縛(四)古人の蹤跡(五)坐禪の骨子(六)佛祖の大恩(七)現在の自己(八)大死人たれ(九)座蒲團の敷方(一〇)坐禪の種類(一一)結伽趺坐(一二)半伽趺坐(一三)降魔坐と吉祥坐(一四)半伽趺坐のある所以(一五)坐處の要心(一六)身の要心(一七)心の要心(一八)身心脱脱(一九)土農工商の禪(二〇)宇宙皆禪(二一)禪三昧

禪宗聖典 總目錄畢

禪宗聖典

第一卷 序 篇

第一章 正傳の佛法

正傳の功徳

破魔の甲冑

◎此法は能一切衆生の諸の惡業果を消す、此法は一切衆生に求る所の願印を與ふ、此法は能一切衆生の生死の險難を度す、此法は能一切衆生の苦海の波浪を息む、此法は能苦惱の衆生而も急難を作を救ふ、此法は能一切衆生の老病死海を竭す、此法は能諸佛を出生する因縁種子なり、此法は能生死長夜の爲に大智炬と爲る、此法は能く四魔の兵衆を破て而も甲冑と作る。

【宗鏡錄】



二教二師無し

① 佛法は諸道に勝れり、所以に人之を求む、如來の在世は、  
全く二教なく、全く二師なし、大師釋尊唯無上菩提を以て衆生を誘引するのみ、迦葉、正法眼藏を傳て以來、西天二十八代、東土六代乃至五家の諸祖嫡々相承して更に斷絶なし。

【聖道用心集】

正法の高深

③ 泰山寸壤を辭せず、故に能其大を成す、河海は細流を擇ばず、故に能其深を就す、願ふに吾法山高して峯の頂無きが如く、深して海の底無きに似たり、誰か瞻仰せざらんや。

【見桃錄】

佛心の至極

④ 此宗門は不思議解脱の道なるが故に、若一度耳に觸る者には菩提の勝因となり、若此宗門を修せば、佛心の至極とす。

【聖一假名法語】

最上乘の佛法

⑤ 此單傳正直の佛法は、最上の中に最上なり、參見知識の始より更に焼香禮拜念佛修懺看經を用ゐず、但し打坐して身心脱落するを得よ。

相承の宗旨

⑥ 嫡々相承せるは、この坐禪の宗旨のみなり。

【正法眼藏】

佛法は諸道の極意也

⑦ 佛法と云は、貴賤男女を分ず、草木瓦石に至迄各具足の佛法にして、出家のみ信すべきに非ず、只手を動し、足を働し、目に色を見、耳に聲を聞、此の如く老僧が庵室へ來るも去るも、此の道理ぞ、是人々具足佛法の妙用なり、佛法と云は、人々の一心の名也、乃至佛法は武に於て武道の極意たり、歌道に於て歌道の大本たり、其餘の諸道百藝、其主要に到ては、凡て一心に攝るなり。



正法と大心

大心の意義

信解の功德

【澤水假名法語】

⑧ 我わが是この正法しやうはふは、僧俗そうぞく男女なんによを論ろんせず、貴賤きせん老少らうしやうを擇えらばず、根こんに大小だいせうなく、機きに智鈍ちどんなし、只ただ大心だいしんある者ものの畢ひつ竟きやうして成辨じやうべんせざるとなし、是故このゆゑに深く此法このはふを信しんじ、切せつに解脫げだつを求もとめて、分ぶんに隨したがつて歩ほを發はつして、途路みちぢの長短ちやうたんを説とくと莫なれ。

⑨ 夫それ大心だいしんとは、能よくく此法このはふを信しんずる是これを大心だいしんと謂いふ、此法このはふを信しんせざる者ものは、縱たと使へ六神通じくじんづうを具ぐし、大光明だいくわうみやうを發はつし、無量むりやうの聖道せうだうを成就じやうじゆすとも、畢ひつ竟きやうして皆みな是これ小心的しやうしんの衆生しゆじやうなり。

⑩ 若もし此この如來にやらい無量むりやうの不可思議ふか思議しぎ、無障むしやうむ、無礙むげ、智慧ちゑの法門はふもんを聞きくことを得え、聞きて已まに信解しんげし、隨順ずいじゆんし、悟入ごにふせば、當まさに知しるべし、此人このひとは如來にやらいの家いへに生しやうじ、一切さい如來にやらいの境界けいがいに隨順ずいじゆんし、一切諸さいの菩薩ぼさつの法はふを具足ぐそくす。

如來の家宅

譬諭

② 何なにをか如來にやらいの家いへに生しやうずと謂いふ、差別さつべつ悟後ごの妙行めうぎやうを父ちちと爲なし、根本こんぽん見性けんしやうの大智だいぢを母ははと爲なし、中なかに於おいて一念ねん信しんを生しやうずる時とき、早はやく如來にやらいの胎中たいちゆうに託たくす、是これより途路みちぢの長短ちやうたんを論ろんせず、歩ほを發はつして進修しんしゆし、分ぶんに隨したがつて參詳さんしやうする者ものは、皆みな十月じつげつの消息しやうそくなり、時とき到いたり功滿かうみつる、是これを滿月まんげつと謂いふ、是これの時ときに當あたつて種々しゆしゆの境きやうを現げんする者ものは、子胎こはらを出いでんと欲ほつするの前ぜん表べうなり、學人がくじん現境げんきやうに著ちやくせず、單々たんたんに參取さんしゆせば、一朝てう豁然くわつぜんとして現前げんぜんす、是これを如來にやらいの家いへに生しやうずと謂いふ。

③ 譬たとへば誕生たんじやう王子わうしの才智さいぢ力用りきやう、未いまだ父王ふわうに似にずと雖いへども、種族しゆぞく體相たいしやう一切さいの尊貴そんき、父王ふわうと少すこも異かはること無し、百官ひやくくわん卿相けいしやうの才智さいぢ力用りきやうある者ものも、亦また卻かへつて之これを尊崇そんそうせずんばあるべからざるが如ごとし、如來にやらい法王はふわうの眞子しんしも亦また復また是これの如ごとし。



佛陀と大悟

③ 智慧辨才解脱神通未だ佛に似すと雖も明了に諸佛の體相を具足し明了に諸佛の種性を圓滿し智慧の性辨才の性解脱の性神通大慈大悲大方便大光明佛と少しも異なること無く菩薩羅漢の解脱ある者も亦卻て之を尊崇せずんばあるべからず豈快ならずや。

向上の一路

④ 前に向上出身の一路あり是を祖師不傳の一著と謂ふ是故に盤山曰く向上の一路千聖不傳學者形を弄すること猿の影を捉るが如し或は又是を最後の句とも謂ふと浮山曰く最後の一句始て牢關に到る指南の旨言詮に在らず從上の佛祖的々相承する者皆此一著子なり衲僧家縱使玄微を窮盡し重關を透破して向上難透の因縁を見徹すとも亦卻て此の些子の事を蹉過す是

盤山とは寶積禪師なり

浮山とは遠錄公のことなり

著子、些子共に同一の

突貫は徹底せる最高理想を云ふ

無念の念を念とす

諸惡莫作

他なし悲願深重ならず志氣高邁ならず慚愧親切ならず疑心審細ならざるが爲に依然として尙舊窠窟裏に在り是故に古へ聖人國師の如き且く理致機關向上の三宗を立して切に此弊を救ふ。【宗門無盡燈論】  
⑤ 佛言く吾法は無念の念を念とし無行の行を行とし無言の言を言とし無修の修を修す會する者は近く迷ふ者は遠し言語道斷物の拘る所に非ず。

【佛說四十二章經】

⑥ 此無上菩提を或從智識して聞き或從經卷して聞く始は諸惡莫作と聞ゆるなり諸惡莫作と聞えざるは佛正法に非ず魔說なるべし諸惡莫作と聞ゆる是佛の正法なり。

【正法眼藏】



⑦ 白居易侍郎、鳥窠道林禪師に問ふ、如何是佛法大意、師云、諸惡莫作、衆善奉行、白雲三歳の孩兒も也、與麼に道ことを解す、師云、三歳の孩兒道得と雖、八十の老翁行ずることを得ず。  
 【禪林類聚】

⑧ 達磨大師此土に西來するに、名言に涉らず、修證を立す、唯直に人心を指て性を見て佛と成しむるのみ、夫心は本形無し、云何が指すべき、性は本相無し、云何が見るべきや、佛は本より現成す、云何が復成せんや、其意は祇是衆生妄に諸見を起し、本心を迷却するに因る、故に海を渡り、西來して、其妄見を息還て本心を得せしむるなり。  
 【鼓山晚錄】

一字不説

⑨ 我成道してより已來一字を説かず、汝も亦聞かず。

諸法と佛法

⑩ 一切の法は皆是佛法なり、障礙あることなし。  
 【般若經】

佛教即宇宙無佛法

⑪ 佛教と云は萬象森羅なり。  
 【宗鏡錄】  
 ⑫ 忽に佛法の二字を聞も、早く是我耳目を汚す。  
 【正法眼藏】

教外別傳其一

⑬ 世尊拈華し、迦葉微笑してより以降、相傳て焰を續ぎ輝を接して、直に而今に至まで天壤を照映して幽として燭すと云と無し、是を教外別傳の禪と謂ふ。  
 【寂室錄】

八宗の大綱

⑭ 夫禪門は法城を鎮護し、眞風を隆興し、嚴關を屹立し、衲子を鞭驅し、法燈を澆末に挑げ、惠命を濁世に續ぐ、八宗の大綱、一乘の高梁にして、寔に大人の能事なり。



以心傳心其一

以心傳心其二

【槐安國語】

諸佛は法愛を斷して經書を立せず、亦語言を莊嚴せず、此の如は大聖人其意何ん嘗て教に在や、經に曰我道場に座す時一法實を得ず、空拳にして以て小兒を誑し、以て一切を度すと、是豈大聖人教を以て權と爲して必ず之を專にせざるに非ざるか、又經に曰始鹿野苑より終拔提河に至迄、中間五十年未だ曾て一字を説かずと、是豈人をして其教迹を執らするに非ざるか、斯固より其教外の謂なり、然り此極且奥底は經に載すと雖亦但説のみ、聖人此を驗す、故に心を以て相傳ふ、禪者の所謂教外別傳は乃此なり。

【智度論】

教外別傳其二

不立文字其一

方便の文義

【圓悟禪師語錄】

へ、一印に印定す、眞指人心見性成佛、不立文字の語句、之を教外別傳、單傳心印と謂ふ、若言詮露布に涉り、階を立し、梯を立し、格内格外を論量する時は、則本宗を失す。

【枯崖漫錄】

若し諸法の本源を悟れば、即ち文字あることを見ず。  
祖佛の本意は、皆心を明め道に達せんが爲なり、假に文



教外別傳其三

義を以て直に心源を指す、豈詮を執て旨に迷ひ、心に背て道を求むべけんや。  
【宗鏡錄】  
夫教外別傳と云は、鏡も影も打破して、總て六識の思量を絶し、迷悟の差別を爲さず、念は有らばあれ、無ばなけれ、其にも倚らず、是非を存せず、是非を離れず、知識の下す處の一句を得て、慥に透らんと工夫するなり。

【大應假名法語】

人其儘の道理

禪宗は、教外別傳、不立文字と云て、教へもせず、習ひもせず、人々生れ得たる道理の儘なり、是を本來佛とも云て、本來具足したる道理なり、教無し、本心の道理は、悉く埒の明たる者なり、水は冷に、火は熱く、呼べば答ふ、手足の動まで自ら習はずして、知たるものなり。

水は冷、火は熱

我宗の文字

【大道假名法語】

我宗は、語言文字に資と無し、然ども、語言文字を廢することを得ず、猶醫家の砒霜、烏啄を排斥すること能はざるが如し、故に其善用する者は、人を活し、善用せざる者は、人を殺す、殺活の際、髪を容ること能はず、蓋し毒藥の用ゐる難きや久し、唯其醫の良不良に在のみ。

【便成和尚語錄序】

文字は禪に非ず、文字と見性

禪は、文字を離れ、語言を絶す、苟も語言文字に涉るは、皆禪に非るなり。  
【幽谷餘韻】  
學者、文字語言に泥むべからず、蓋し文字語言は、他に依り、解を作て、自悟の門を障て、言象の表に出ること能はず、昔達觀、隸、初て石門聰和尚に見え、室中、口舌の辨を馳

達觀、隸、石門聰



禪師の名嗣  
なり

騁す、聰曰、子の説所は乃ち紙上の語なり、其心の精微の  
若は則未だ其奥を觀ず、當に妙悟を求むべし、悟る時は  
則超卓傑立にして、言に乗せず、句に滯らず、獅子王の吼  
哮すれば、百獸震駭するが如し、廻て文字の學を觀ば、何  
ぞ雷に什を以て百に較べ、千を以て萬に較ぶるのみな  
らんや。

【龍門記聞】

本心と禪

⑤ 禪法とて始めて立たる宗なし、只諸の衆生、一源の本心を  
指て宗とす、是心即佛性なり、是性を見るを修行とす、佛  
性を悟れば、忽爾として、妄縁を離却して、文字に拘らず、  
法塵に染ざる此を名て禪とし、禪を得を成佛とす、此是  
眞佛は、即今人々の方寸の中に在て、見聞覺知の主たり。  
⑥ 若人斯の如くに悟得せば、身心これ禪なり、誰たぬにか

身心皆な禪

本有の自性

得易く、誰がたぬにか難からん。  
⑦ 諸佛の出世、祖師の西來、嘗て一法の人に與るなし、只人  
々本有の自性を直指する而已なり、夫本有の自性と云

【鹽山和泥合水集】

棒喝の本義

旨全體作用の處なり、更に擬議思慮の及ぶ處に非ず、是  
故に古人僅に口を開て如何と問は、即喝し、即棒し、或  
は推出し、或は踏倒す、徹骨の慈悲、老婆親切なり、何の恩  
力か、是に及ばんや。  
⑧ 問、如何か、是本來宗師云、密室風を通せず。

【月菴假名法語】

⑨ 達磨大師より中國に到迄、唯一心を説き、唯一法を傳ふ。

【楊岐和尚語錄】

佛を以て佛に傳へ、餘佛を説かず、法を以て法を傳へ、餘法

本源の清淨  
心

本來宗



本心の智慧

を説す法は即説べからざるの法、佛は取べからざるの佛、乃是本源の清淨心なり、唯此一事のみ實なり、餘の二は眞に非ず。

【傳心法要】

④六祖の云、本性に自ら般若の智あり、自ら智慧を用て觀照せよ、文字を假じ、若是の如ならば、何ぞ更に文字を立ることを用んや、今未知の者の爲に、假に文字を以て指歸して、自性を見せしむ、若發明の者は、即是豁として、還て本心を得ん。

【宗鏡錄】

④禪學の一宗は、自から其本心を完するに非ずと云ことなし。

【禪餘外集】

④達磨西來より已來、文字の營を捨て、教、行、證を立せず、立處に昔時の我を明む。

【峩山假名法語】

禪の宗と體と用

④問、此頓悟の門は、何を以てか宗と爲し、何を以てか旨となし、何を以てか體と爲し、何を以てか用と爲す、答、無念を宗と爲し、妄心起ざるを旨となし、清淨を以て體と爲し、智を以て用と爲す。

【禪海探珠要訣】

④祖師の西來は、法の傳べきあり、以て此に至ると爲すに非ず、但直に人心を指して、見性成佛せしむ、豈門風の尙ぶべきあらんや。

【宗門十規論】

④夫教外別傳の宗旨を云ば、佛祖の始て建立する底の法に非ず、本より人々具足し、箇々圓成して、諸佛衆生の本分の事なり。

【拔隊假名法語】

④古佛の曰、但一心を正傳して、佛敎を正傳せずと謂ふ者は、佛敎の一心を知らず、一心の佛敎を聞かず、一心の外

人々具足の法  
一心の佛敎

直指と門風



心外無法

④ 佛敎ありと謂は、汝が一心未だ一心ならず、佛敎の外に一心ありと謂は、爾が佛敎未だ佛敎ならずと、則是佛敎の一心、一心の佛敎なり、是を以て取べき無が故に捨べきあること無し、心外に法なく法外に心なし。

【驢耳彈琴】

禪は修證に渉す

⑤ 義學の徒は、名相に膠す、但四禪八定、修あり、證あり、階梯を歴、地位を立て、以て禪と爲すことを知て、我宗敎外別

一聞千悟

傳最上乘の禪、修證に渉す、地位を立て、唯上根上智の人あり、乃能く一聞千悟し、而して靈山最後、獨り摩訶迦葉に付するの燈を得て、諸佛大覺圓滿の芳を聯ことを知す。

【幽谷餘韻】

離念清淨

⑥ 其學を絶つ時は、離念清淨、純眞一如にして、復た分別す

正法の香

る所あらず。

【輔教編】

自悟宗

⑦ 正法の香と云は、其五種あり、一には戒香、所謂能く諸惡を斷じ能く諸善を修す、二には定香、所謂深く大乘を信じて心に退轉無し、三には慧香、所謂常に身心に於て内に自ら觀察す、四には解脱香、所謂能く一切無明の結縛を斷ず、五には解脱知見香、所謂觀照常に明かにして通達無碍なり、是の如き五種の香を名て最上の香と爲す、世間比なきなり。

【少室六門】

⑧ 諸佛出世するも、法の人に示す無く、祖師西來するも、道の指すべき無し、唯自悟を談ず、是を頓門と謂ふ。

【佛眼和尚語録】

不傳の法

⑨ 嘗て一法の他に與べき無く、一法の人に受る無し、是を



直指に指なし

相傳の意義

大安樂

無心と道

心即如來禪

喚で正法とす。

【瑩山傳光錄】

⑤ 直指に指なし、默契して言を忘ずるに在らんことを要す、心宗に宗なし、縁に隨て悟入することを妨げず、故に

華を拈じ拂を豎て、本有の光明を打開す。【禪餘外集】

⑥ 相傳と云は、一法を相傳するに非ず、佛見、法見、有相、無相、

共に截斷し盡て、胸中に一物も存する處なくして、孤明

歷々、赤洒々として、三世十方を貫通すれども、鳥道の虛

玄なるに似て、羚羊の角を掛たるに異らず、是即大安樂

の處なり、唯此安心安樂の處を傳て、更に一法として人

に授る所なし、されば道無心にして人に合ひ、人無心に

して道に合ふと云へり。【大應假名法語】

⑦ 來らんと要すれば自ら來り、問んと要すれば自ら問て、

他人の力に依ず、佛祖の教を聞ず、此心便ち教外別傳、不立文字の全體也、此心便ち如來清淨の禪也。

【拔隊假名法語】

心法を咨決せよ

⑧ 吾此宗乘は、文字に黏せず、經論に拘らず、唯純一に心法

を咨決せんことを要す、心法を決せずして、縱妙言妙句

を吐も、皆是野干鳴と成る、若能心法を決せば、則語默動

【大綱禪師語錄】

嗣承と偈頌

⑨ 夫向上の一路千里不傳、豈其語句に即て之を求べけん

や、然と雖も、上七佛より下今に迨まで、其偈頌を以て之

が嗣承を印して上古に綿々たらすと云ことなし、是偈

頌の我に於る、蓋し布帛菽粟の一日も廢すべからざる

【幽谷餘韻】



一 字不立  
 (一) は言語に執着して自由ならぬこと  
 (二) は大恥かき失敗に終ること  
 解脱の大道

禪と武斷

⑤ 箇の佛の字を道も(一) 拖泥帶水、箇の禪の字を道も(二) 滿面の慚惶、久參の上士は之を言ことを待たず、後學の初機直に須く究取すべし。  
 【碧巖種電鈔】  
 夫坐禪の宗門と云は、大解脱の道なり、諸法は皆此門より流出し、萬行も皆此道より通達し、智慧神通の妙用も此中より生じ、人天の性命も此中より開けたり。  
 【聖一假名法語】  
 ⑥ 禪の道は參を尙ぶ、參の義たる師長の能詔る所に非ず、兄弟の能代る所に非ず、客氣の能難る所に非ず、外形の能拘る所に非ず、唯自心の力、勇猛直前するに在り、關壯繆が單刀匹馬にして、直に百萬の軍中に入て、其巨魁を斬が如し、豈偉ならざらんや。  
 【禪餘内集】

禪は商量に非ず

佛道の正門

身心脱落

⑦ 我宗門下は、抵直下の親證を貴ぶ、逐段商量底の禪なし、亦漸次習得底の禪なし、所以に汝が拍盲に倣し、將去らんことを要す、胡思亂想して、妄に知解を生ずることを許さず。  
 【禪餘外集】  
 ⑧ 諸佛一大事、因縁の爲に世に出現して、直に衆生をして佛の知見に開示、悟入せしめ、玉ふ、而して寂靜無漏の妙術あり、是を坐禪と謂ふ、即是諸佛の自受用三昧なり、又三昧王三昧と謂ふ、若一時も此三昧に安住すれば、則直に心地を開明す、良に知る、佛道の正門なることを。  
 【坐禪用心記】  
 ⑨ 坐禪の一門は、便ち直指人心、見性成佛の西來意なり、君に勸む、尋常蒲團上に坐して、身心脱落せよ。



常住の禪

【義雲語録】

◎ 禪宗に相傳ふる所の禪は、常禪なり、人無く住なく出なし、入ること無が故に、得ること無し、住すること無が故に、失ふことなし、出ること無が故に、間斷なし、凡夫に在て、亂に非ず、諸佛に在て、寂に非ず、靜も靜すること能はず、動も動すること能はず、生も生ずること能はず、滅すること能はず、垢も垢すること能はず、遙に四禪八定の表に出で、懸かに諸宗の門に異なる。

不傳の秘訣

◎ 禪門の秘訣は、教ゆべからず、傳ふべからず、教ゆべくして、教へざるに非ず、傳ふべくして、傳へざるに非ず、教ゆべきは、私の教ゆる所以に非ず、傳ふべきは、私の傳ふる所以に非ず、譬ば、生盲の乳は何に似たるかと問ふが如し。

正傳の坐禪  
禪院の儀式

し、之に答て雪の如しと曰ときは、冷かなる想を生じ、乃至鶴の如しと聞ときは、動く想を生ず、冷と動と豈乳色ならんや、彌迷ふて、彌迷ふ、渠自ら明目を開き、自ら乳色を見るを、除て、別路の渠をして、乳色を知らしむるなし、禪門の秘訣も、亦是の如し、自ら法眼を開き、自ら本性を見るを、除て、更に方便の他をして、秘訣を知らしむること無し。

【獨菴護法集】

【永平家訓】

◎ 佛々祖々正傳の正法は、唯打坐のみ。  
◎ 今禪院と稱する寺院の圖樣儀式は、皆是祖師の親訓、正嫡の直傳なり、所以に七佛の古儀は、實に是禪院のみ、禪院と稱するは、亂に稱すと雖、而今行ふ所の法儀は、實に是佛祖の正傳なり、然ば、乃ち吾宗は本府なり。



第二章 所依の經典

【寶慶記】

序

經は閑文字

① 與て之を論ずれば一大藏教皆是所依也奪て之を論ず

れば一言の所依なき也【興禪護國論】

② 十二部經は總て是閑文字にして千經萬論も只是心を

明め言下に契會せば教何を將てか用ん至理は言を絶

す教は是言詞實に是道にあらず道は本言なし言説は

是妄なり【少室六門】

③ 諸佛の慧命は文字に非ず然れども之を文字に托して

以て傳ふ故に善讀む者文字を化して慧命と爲す善讀

ざる者は慧命を化して文字と爲す慧命を化して文字

文字と慧命

楞伽經と所依の意義

値楞伽經の價

と爲すと曰と雖而も文字の存するは即慧命の存するなり春は花に在て花未だ残れざれば則ち春未だ残れずと爲すが如きのみ【禪餘外集】

④ 初祖西來して創て禪道を行して心印を傳んと欲する

に須く佛經を假るべく楞伽を以て證明と爲して教門

の自ふ所を知らしむ遂に外人の謗を息て内學稟承し

祖胤大に興て玄風廣く被らしむることを得たり【宗鏡錄】

⑤ 愚人は不立と説を見て就便一向に空と執す只不立文

字と説く反て佛經を謗るは罪障深重なり戒めざるべ

けんや見ずや達磨傳法の偈に「吾本此土に來て法を傳

て迷情を救ふ一華五葉を開き結果自然に成ず」と祖又



佛心と佛語

曰、吾に楞伽經四卷あり、亦用て汝に付す、即是如來心地の要門なり、諸の衆生をして、開示悟入せしめよと、此の如の者、達磨豈文字の人に與ふる無けんや、先徳の曰經を看者は、佛の理を明にする也、即是教を藉て宗を明にす、心と教と合し、心を以て心を印するは、二無く別無し、故に知ぬ、眞乘に達せんと欲せば、須く教典に親むべく、教を稟て、乃能理を明にす、理を明にして、然後に修行すれば、行願虧ること無し、道果證すべきを、看よ、教に既に此益あり、焉ぞ其教法を輕すべけんや。 【歸元直説】

六 禪は是佛心なり、經は是佛語なり、故に楞伽に佛語心品あり、法華に開示悟入佛の知見の義あり、涅槃に常樂我淨の旨あり、皆一道なり、譬ば琵琶琴瑟に妙音ありと雖、

教内と教外

若妙旨無ければ、終に發すること能はざるが如し、指即妙音即佛心なり。

七 今時往々、沒意智を以て禪と爲して、經論を用ゐず、却て道ふ、教外別傳、何ぞ經論を用んと、知らず、教外分明ならば、教内何ぞ妨げん、教外若教を容れずんば、教外も亦眞に非ず、何を以ての故に、鏡若明了なれば、物像を擇ばず、像若現れずんば、鏡未だ明了ならず、汝鏡の塵垢を藏さん、が爲に、卻て物像を斥く、若是大道ならば、此見を作さず、況や又經中甚深の意趣あるをや、能く汝許多の見障を指出す、只所見分明ならざるが爲に、卻て如來の金言を謗倒して、經中難解の立旨を窮むること、能はず、是經論を以て、宗と爲すに、あらず、且く經論を以て、明鏡と爲

【大光明藏】



經卷と禪  
錄は悟前の  
要具  
師とは瑩山  
禪師のこと  
なり

すのみ、教を以て自性を照し、自性を以て教を照して、彼  
此明了ならんことを要す。  
【宗門無盡燈論】  
禪家に所謂不立文字、教外別傳と在りと雖、一大藏教皆  
是文字なり、禪家の語録も亦是文字のみ、若文字無んば、  
佛祖の言教何に依てか末世に流布せんや、師曰く、文字  
は、是魚兔の筌蹄なり、若魚兔を得れば、則ち筌蹄渾て是  
用ゆる所なし、修多羅の教は、月を標するの指なり、若月  
を觀れば、則ち指亦用所なし、然れども人皆筌蹄を認て  
魚兔を得ず、指頭を認て月を觀ず、故に不立文字と曰ふ、  
世尊四十九年、堅說横說、最後に至て、一枝の華を拈して  
衆に示す、衆皆默然たり、唯迦葉尊者のみ破顔微笑す、是  
則ち不立文字、教外別傳の極致なり。

一切經は指  
の如し

經と本心

⑨ 修多羅の教は、月を指す指の如し、未だ月を見ずんば、指  
に依べし、月を見て後は、指も無益なり、未だ佛心を悟ら  
ざる時は、教に依べし、若佛心を知見する時は、萬の法門  
皆一心に歷々たり、一心を悟了て後は、一教をも用ず、祖  
師の言句は、門を叩く瓦の如し、未だ門に入ざる時は、瓦  
を提げ、既に門に入ぬれば、瓦を提げて何かせん。  
⑩ 經陀羅尼と云ふ、文字に非ず、一切衆生の本心なり、本心  
を失へる人の爲に、様々の譬を取て、教て、本心を悟らし  
め、迷の生死を止めんが爲の言なり、本心を悟り、根源に  
歸る人は、眞實の經を讀なり、文字を眞の經とは云べか  
らず、若文字を口々に唱し、至極と云ば、寒する時、火と云

【瑩山十種疑問對】



經論と禪

て煖に熱する時風と云て涼かるべきや又飢て食の名  
 を唱へ欲き物の沙汰をして即飽満すべしや故に終日  
 火々と唱ても熱るべからず通夜水々と云とも口は沽  
 ふべからず文字言句は是繪に畫ける餅の如し一生口  
 に唱るとも飢は止べからず  
 【聖一假名法語】  
 禪宗は一切の經論に依ずして一切の經論は禪宗に依  
 ものなりとは豈空言虚論ならんや夫禪宗は文句義理  
 を傳ず信解行證に由らず直指人心見性成佛は一切諸  
 佛の太祖に嗣ぎ一切經論の大宗を立る者なり圓覺經  
 に曰修多羅の教は月を標する指の如し若復日を見ば  
 指す所畢竟月に非ざるを了せんと然らば則指を  
 忘て月を見る者は教外に禪宗を立るを疑はず指を

禪は經法の  
所詮に非ず

藏經は文字  
に非ず

認て月と爲す者は教を外にして禪宗あるを信せざ  
 るなり  
 【辨辨惑指南】  
 達磨西天の廿七祖に繼で如來圓極の心宗を以て之を  
 禪と云ふ此禪は多の名を含めり又は最上乘の禪と名  
 け亦は第一義の禪と名け二乘外道四禪八定の禪と實  
 に天淵の間あり當に知べし是禪は一切經法の所詮に  
 依ず一切修證の所得に依ず一切見聞の所解に依ず一  
 切門路の所入に依ず以所に教外別傳と云なり惟大心  
 の衆生のみ夙に佛種に熏じて階梯に渉らず一聞千悟  
 して大總持を得  
 【山房夜語】  
 問者あり不立文字教外別傳此は是我禪徒の論一大藏  
 經の文字當體應縁の教乘とは何ぞや答云一大藏經當



教と禪

佛經と禪錄

體應縁を除て不立文字教外別傳の深旨あるに非ず、一  
 大藏經即文字に非ず、當體應縁即是教外別傳、恁麼に見  
 得する時は則ち文字、性空、教乘、無相、有相、性空、強て禪旨  
 と名く、所謂始め光輝より終り跋提に至る迄四十九年  
 一字不説と云者、金口の宣る所に非ずや、直に是文字教  
 乘に和して即不立文字教外なり、金口の宣る所明白著  
 明是故に我禪の依る所實に一經兩經甚深の説明を採  
 て以て其證と爲すに非ず。

【正山廣錄】

④ 佛語、宗語實に異なるに非らず、但佛語は淺深ありて普  
 く三根を接す、宗語は單に上根を接す、即佛の最上と一  
 乗と及教外別傳と謂ふ所なり。 【禪餘外集】  
 ⑤ 夫佛經禪錄は學人の戟鏡なり、無明の賊を殺し、邪正の

經論の指導

經綱と禪綱

經論を輕んずる勿れ

形を照す所以なり。  
 ⑥ 參學底の人、自己を悟ると雖猶明眼の人の夜行の如し  
 未だ經論の寶矩を得ずんば、則ち嶮難通塞を照し見る  
 こと能はず。 【獨菴護法集】

⑦ 淨住の説禪師、達觀に問ふ、某甲、經論は粗明む、禪は直に  
 信せず、願くは師疑を決せよ、觀云、既に禪を信せずんば  
 豈經を明むべけんや、禪は是經綱にして、經は禪綱たり  
 綱を提げ綱を正し禪を了じて經を見よ。 【禪林類聚】  
 ⑧ 吾門の或人或問を設て曰、禪宗に云所の不立文字教外  
 別傳、何の經論に出るや、答て曰、不立文字教外別傳は、經  
 論の徑蹊に涉らず、報化佛頭を坐斷し、經論の外に向て  
 獨り佛心印を傳ふと、吁、恁麼に經論を蔑視して、外更に



經と教

別傳の心印ありと云者は何の謂ぞや、未だ夢にだも佛祖の宗乘を見ざる也。  
【鹽耳彈琴】  
⑤ 投子禪師、僧問ふ如何か、是經師云、維摩、法華、栢巖禪師、僧問ふ如何か、是教師云、貝葉收め盡さず。  
【禪林類聚】

教と禪

④ 禪は即ち離文字の教、教は即ち有文字の禪なり。  
【東語西話】

經禪の不二

③ 蓋し、直指の禪旨、教外別傳、不立文字と曰と雖、文字の性空じ、教觀の義融する時は、教觀の文字即直指の禪旨、直指の禪旨即教觀の文字にして、教の外に禪無し、禪の外に教無し。  
【正山廣錄】

來經卷と如

③ 經卷は如來全身なり、經卷を禮拜するは、如來を禮拜し

經論即ち經論

奉るなり、經卷にあひ奉れるは、如來に見え奉るなり、經卷は如來全身なり。  
【正法眼藏】  
③ 杭州永安道原、僧問ふ、五乘三藏に委しき者は頗る多し、祖意西來乞ふ師指示せよ、師曰く、五乘三藏。  
【道源禪師語錄】

自己の寶藏

一一自己の寶藏を打開して、一大藏經を運出せん時、聖教自ら我有なるを得ん。  
【傳光錄】

第三章 教禪の批判

批判の標準 佛教

① 夫佛法は佛法を以て批判し、天魔外道、三界六道の法を以て批判すべからず。  
【永平廣錄】  
② 怨恨無き教を佛教と爲し、誣訟無き教を佛教となし、誹



禪と諸佛の優劣

【寶藏經】

③ 我今時の佛法を見るに、其道を得ること無し、但國家の衛護と作る、所有善根皆福德を成ずるが故に、佛法混亂して、正法を聞き難し、各々己見を出して、是非鋒の如く起る、彼の持戒苦行の如き、錯て功德を求むるが故に、多く人天の勝樂を受く、稱名念佛は戲樂を貪求するが故に、大福德の家に生ず、諸天の淨土あり、鬼神王の淨土あり、八部衆の淨土あり、正路に依らず、錯て往生を求る者は、多く之を出でず、眞言天台諸餘の聖道、各々先達の明師なきが故に、只々文字に著して、經意を究めず、勝負の修羅、人我無明、却て地獄の業を長ず、眞修ある者も、亦異見を出でず。

【宗門無盡燈論】

教禪の別

④ 禪教の同からざること、直に矢に當者と人の矢に當て死したる道理を、傍にして是を見て、縱横に說者の如し、見性の者を禪とし、說性の者を教者とす、猶火の熱道理を知者と、直に火中に入りて命根を斷し、機智を忘して、焰と一如になり得たる者との如し。【鹽山話泥合水集】

諸宗と禪門

⑤ 諸宗は單に見地を重んず、吾宗は兼て功勳を論ず、故に稱して、了當と爲す者も、吾宗には方に入門を許すのみ。

【洞上古轍序】

教と信縁

今此處の一著子とは、一方便と云ふ程の義

⑥ 今禪學者、教乘を立せずと雖も、先づ教を以て信縁と爲し、及び修因と爲す、維摩經に曰く、只其病を除て、其法を除かずと、正眼に看來れば、五時八教三乘一乘、齊く是祖師向上の一著子にして、汝が嘴を下す處なけん。



顯密と禪

途路とは  
途中のこと  
なり

自家の財寶  
を運出せよ

⑦ 顯密の諸教は、今我全く不是とは道はず、只途路に在て佛の妙境を論じ、自の分上に於ては證入すること能はず、法身すら尙得ず、何に況んや、法身向上の事をや、是故に教乘は偏に途路の親疎を論じ、禪門は頓に途路の超遍を示す、教乘は遙に成佛の妙境を説き、禪門は直に成佛の端的を試む。

⑧ 譬ば貧人の富家の財寶を論ずるが如し、論じ得て妙を盡すと雖も、自ら用ふることも能はず、何の益する所かあらん、譬ば庶人の國王の尊貴を論ずるが如し、論じ得て妙を盡すと雖も、依然として是庶人なる已耳、若國王の尊貴を望み、富家の財寶を羨まんよりは、自ら護得するの好には如かず、其求むる時に當て、國王の尊貴を顧み

脱體現  
成とは煩悶  
を解脱して  
佛と爲るこ  
となり

自得を貴とす

ず、富家の財寶を管せず、只自家に向て、己が財寶を論じ、己が尊貴を試て、之を求め、之を辯じて、分に隨て増進す、此故に、意相似ると雖も、進修遙に別なり、若經教を以て之を修すれば、多く教跡に滯る、何の時か脱體現成することを得ん。

⑨ 譬ば、商人の他の利を得る時の状を守りて、自ら時を失すれば、却て利を得ざるが如し、利を得るに状なし、得を以て貴と爲す、譬ば將帥の他の功を得る時の状を守りて、自ら時を失すれば、却て功を得ざるが如し、功を得るに状なし、得を以て尊と爲す、譬ば、死守せず、他の底意を究て、其方便を知り、時に應じ、變を觀て、取捨宜に隨ふ、我祖宗門下は、教跡に依らず、別に意



顯密は閑妄  
想

趣あり機に應じ物に接して無礙自在なることも亦復  
 是の如し若全く富家の財寶を得んと欲せば先須く自  
 心の富家に還すべく無盡の法藏自然に手に入らん若  
 全く國王の尊貴を得んと欲せば先須く自心の國王に  
 謁すべし無上の尊貴畢竟して身に歸す。  
 ◎古來の教者は間是の如く會する者あり是故に教より  
 入る者も亦少しとせず今時は一向然らず其談する所  
 の者は盡く極妙究玄二乗を呵斥し權乘を妄倒し偏圓  
 顯密各々箭鋒を争ふと雖も點檢し將來れば二乗の果  
 證すら尙未だ得ること能はず何に況んや菩薩をや一  
 佛乘に於ては夢にだも曾て見ず偏圓顯密什麼の處に  
 か在る我祖宗門下の如きは又且然らず直に方便を超

教禪の優劣

華嚴と禪

て辛參苦修纒かに旨を得る時は顯密佛法一時に現前  
 す重て許多の牢關を衝開して却り來て經論を看見す  
 るに己自ら説が如し而後般若の稠林を摧殘し菩提の  
 道場を踢倒し向上的の些子を滅し佛祖の正脈を斷ず顯  
 密都來是何の閑妄想ぞ法身智身亦須く倒退三千にし  
 て始て得べし。  
 ◎參禪の士未だ徹證せずと雖其益必ず教を看よりも大  
 なる者あり良に以れば參禪の一念は蓋無上の心を發  
 し無上の會を求むるなり其功眞寧を量あらんや。  
 ◎華嚴は法界を宗とし少林は一心を傳ふ路は兩徑に分  
 れども歸は一揆に本く況や眞實參禪の者は古より必

【宗門無盡燈論】

【禪餘外集】



禪は各宗の根本也

祖意と教意

離文字有文字

教と禪

す庶務を兼ねぬ。

【禪餘外集】

③ 禪とは佛心なり、律とは外相なり、教は言説なり、稱名は方便なり、此等の三昧皆佛心より出たり、故に此宗を根本とする也。

【聖一假名法語】

④ 巴陵鑒禪師、僧問、祖意と教意とは同か、是別か、師云、鷄寒して樹に上り、鴨寒して水に下る。

【巴陵禪師語錄】

⑤ 禪は即離文字の教、教は即有文字の禪なり。

【東語四話】

⑥ 參禪の者は、口を教外別傳に籍て、教を離て參ずるは是邪因なり、教を離て悟るは是邪解なることを、汝參じて得悟するも、必ず須く教を以て印證すべし、教と合はずんば、悉く邪ならん。

【竹窓隨筆】

教禪一致

祖教一致

無二無三

教に二三なし

⑦ 禪と教とは二あるに非ず、教は禪の詮たり、禪は教の髓たり、文義を執して詮を守れば、禪も亦教たり、文義を離れて心に契へば、教も亦禪と名く。

【禪餘外集】

⑧ 祖と教とは水と波との如し、豈に異あらんや、教者は多く、教網に纏はれて洒脱なること、能はず、故に古來祖意に參して旨を得る者多し。

【瑩山十種疑問對】

⑨ 善男子、譬へば一の火、然所に因ての故に、種々の名を得るが如し、所謂木の火、草の火、糠の火、麩の火、牛馬糞の火、等之なり、善男子、佛道も亦爾り、一にして二無し、衆生の爲の故に、種々に分別す。

【大涅槃經】

⑩ 如來は但一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を説玉ふ、餘乘若くは二、若くは三あること無し。

【法華經】



一切の教法は同一也

② 神農百薬を誌すこと異りと雖、病を療すには同じ、後稷百穀を標すること殊なりと雖、人を養ふには同じ、聖人の教を爲す同からざれども善を爲すには同じ。

【輔教編】

小乗經

③ 終に小乗を以て衆生を濟度すべからず。

【法華經】

大乘

④ 若思慮無んば則生滅無し、實の如く諸識を起さず安然たり、流注生ぜざれば五淨法を得、是を大乘と云ふ。

【金剛三昧經】

小乗佛と大乘佛

⑤ 佛さへ小乗の佛は大乘の佛に及ばず、菩薩も三乗も通教にも別教にも有て、教々不同なり、然れば佛戒と云へ菩薩戒と云ふも一同に心得るべからず。

【禪戒鈔】

諸宗の淺深

⑥ 俱舍等の三は、淺が中にも淺し、淨土法相三論の三は、淺

大乘と最上乘

が中に深き也、華嚴法華は深が中に淺也、眞言禪宗は深が中にも深なり。

【聖一假名法語】

⑦ 僧問、如何是大乘、師曰、身を正ふして守ること無き是を大乘と謂ふ、僧曰、如何是最上乘、師曰、身を恣にして守ること無き是を最上乘と謂ふ、此旨深細にして端倪を辨

じ難し、只恐くは人錯て會せんことを。

【龍門夜話】

⑧ 人天乗とは何の謂ぞ、漸の漸なり、世俗を導くには至漸より盛なるはなし。

【輔教編】

十宗の判断

⑨ 經論の教、其數無量なれども、我國に傳弘る事は八宗十宗也、八宗と云は、一、俱舍、二、成實、三、律法、四、法相、五、三論、六、華嚴、七、天台、八、眞言是也、淨土、禪宗の二を加て十宗と云也、然に此十宗は、小乗、大乘、權教、實教、顯宗、密宗、聖道、淨道



教外、教外の五双なり、所謂俱舍等の三は小乗、餘の七は  
大乘前の五と淨土とは權教、餘の四は實教、九は聖道淨  
土は即淨土宗なり、九に教内、禪宗は教外なり。

【枯木集】

即心是佛と  
諸宗

九家十宗と  
一身

◎三世の諸佛また自他宗共に即心即佛に極つた者也、依  
て淨家には唯心の淨土、己心の彌陀と云ひ、台家には一  
色一香中道に非ざる無しと云ひ、眞言は即身大日と云  
ふ、皆是即身是佛に極つた者也。 【大道假名法語】

◎今に到て九宗十宗の名あり、處に隨て宗を立し、互に佛  
化を擧ぐ、九宗若し一身の九孔に喩ふ時は、則上體の七  
孔は貴に似て、下體の二孔は賤が如し、然も上下用を相  
爲して、一を缺く時は不可なり、而て我禪を比すれば、中

法の高下は  
實行にあり

體の心孔の如く、一身に主として九孔を總ぶ、若心孔通  
せざる時は、則九孔ありと雖、其用を得ず、七孔二孔及心  
孔と各無住を以て、其位に居り、互に無著を以て、其任を  
領す、二孔の位、二便を受るを以て、任と爲す、隨て受け、隨  
て捨つ、須臾を留す、所謂無住の般若、無著の眞宗、十宗九  
孔同一佛身、身心安樂、是則禪要の做工夫なり。

【世山廣錄】

◎問て云、我朝に傳はれる所の法華宗、華嚴宗、共に大乘の  
窮竟なり、況や眞言宗の如きは、毗盧遮那如來親しく金  
剛薩埵に傳て、師資猥ならず、其談する旨、即心是佛、是心  
作佛と云て、多劫の修行を経と無し、一座に五佛の正覺  
を唱ふ、佛法の極妙と謂べし、然あるに、今云所の修行、何



の優れたたるとあれば、彼等をさし置て一へに是をすゝむるや、示て云、知るべし。佛家には教の殊劣を對論するとなく、法の淺深を撰ばず、たゞに修行の眞偽を知べし。

【正法眼藏】

一代時教は佛の本證に非ず

夫如來の一代時教、頓漸權實の經論は、衆生の根機區なるに任て種の說相あり、是隨宜の說なれば、如來本證の境界を、驀直に示玉には非ず、間に大乘經論の中に、本懷を宣ふ所ありと雖、經師論師の判釋とて、凡夫の情識、知解にて測る故に、正法還て邪義になる多し、是故に文に依て義を解すれば、三世佛の冤讎と、像法決疑經には、說き、四十九年一字不說と、楞伽經には、說かる、是を以て知るべし。如來本證の境界は、畢竟して凡夫の分別情識

頓漸偏圓は同一心なり

經律論は戒を主とす

文字言句の上には無かりけりと云とを。

【自受用三昧】

一歳に非れば、以て萬化の功を終ると無く、一心に非れば、以て萬法の跡を收ると無し、然して春夏秋冬の令、別なりと雖、其別ならざる所は同一歳なり、頓漸偏圓の理、別なりと雖、其別ならざる者は同一心なり。

【東語西話】

世尊四十九年の教海、波瀾浩々乎として、究べからず、之を要するに、經律論の三藏、戒定慧の三學を出でず、後來天台の智者、之を判するに、五時八教を以てし、法藏重て判するに、五教を以てす、其理至れり、然して戒は當願第一件の事、三千の威儀、八萬の細行、乃至禪定智慧、此戒に



十二部教と見性

依らずと云となし、所以に道ふ、戒は明なる日月の如く亦瓔珞珠の如しと。  
【明菴禪師語録】  
一切の善法は、善知識に因て能發起するが故に、三世の諸佛、十二部經は、人の性中に在て自ら具有せり、自ら悟る能はずんば、須く善知識を求めて見性を得せしむべし、若自ら悟らば、外に求るを假ざる也。

【六祖壇經】

佛教と見性

夫佛の教文弘しと雖、自心悟を得るに過るは無し、萬行の本なるが故に。  
【法燈國師法語】

一切の經教無量の法門、或は譬喩の說、或は因縁の說、或は廣畧の說、或は横豎の說、所有の名相句義、皆此心王心所の法なり。  
【宗鏡錄】

心の外に教無し

若本性を見ずんば、十二分教も虚設と爲る、故に知ぬ教に因て心を明めば、何ぞ文義を執せん、又教は心よりして生じ、心は教に由て立つ、心を離て教無く、教を離て心なし、豈心外別に教あらんや。  
【宗鏡錄】

宗門と無門

宗とは何ぞや、流派の出る所を宗と爲す、又法なり、然るに佛祖の宗とする所の者は、妙明の心源を以て宗と爲す、門とは無門を門と爲す、此心性は元來相あると無く、亦門あると無し、我宗此に達するを以て先務と爲す、故に我禪門に命じて宗門と謂ふ。  
【碧巖種電鈔】

禪書の可否

禪宗に貴ぶ者は、不立文字、教外別傳に在り、此土の禪林、競て禪録を講じて、禪宗と稱する者は、不立文字、教外別傳を失ふ者なり、或曰く、然る時は、禪宗の著述一切、講習



宗旨なし

禪源と藥方

すべからざるかと、曰く胡爲ぞ然らんや、永嘉集のごとき  
瀉山警策のごとき、宗密禪源都序のごとき、輔教編等  
のごとき講習すべきもの太だ多し、宗師の提唱に至て  
は、句無く、字無く、義無く、理無し、但參すべし、講すべから  
ず。

④ 窠窟を心意識の内に爲し、奇言妙句を以て口耳傳授し  
以て宗旨と爲す者の、四大分離の且は、一字も用不著な  
り、譬ば蟲蟻の類、世界を朽木の内に爲て、又天地の寛廣  
あることを知らず、一朝樵蘇の者の枯を拾いて一炊を  
資する時は、身心世界俄に灰燼と成が如し。

【獨巷護法集】

④ 一時來て禪源を問者あり、是が爲に告て云、譬ば良醫あ

り、世に出現して五種の藥法を製して、五種の病人を療  
するが如し、方に依て劑を調へ、病に應じて之を與ふ時  
に五弟子あり、各其一方を傳て互に相争競して、己を以  
て是と爲し、他を以て非と爲して、彼の良醫をして眉を  
攢めて喜ばざらしむ、後一人あり、具に五分を傳て、彼の  
病有者に値ば、彼の方を與へ、此病有者に値ては、此の方  
を與ふ、五方交々用て一方に限らず、自然に五方の淵源  
を了知し、一味の本源を納領す、爾時良醫其教ゆべきを  
知て、便ち藥王樹一枝を擧して、默然として示す、彼一人  
頓に其樹枝一切の病人の心肝五臟を照て覆藏する所  
なきを見て、歡喜踊躍奮然として拜起し、其樹枝を奪ひ  
得て、而後、或時は一味單方、或時は五方合著、々病に應



禪宗に南北無し

じて方の名くべき無く、恰も善く柳下惠を學ぶ者は、其  
 迹を師とせざるに似たり、如來大醫王も亦復是の如し  
 華嚴乃至法華五時の法藥、皆人天の病の爲に製する所  
 然も諸の弟子、各一時一經を取て餘時餘經を破す、彼の  
 世醫の五弟子の如にして、獨り金色頭陀、通方の眼を具  
 て、一法に拘らず、其一華を拈じて、五經の淵源、一句の根  
 を開示するに當て、破顔微笑して、默然の源に合す、或本  
 時は一句全提、或時は五經和合、著々心に歸して、法の名  
 くべき無し、是我從上の禪源にして、一を得て餘を非す  
 るの輩、圓頓半滿の定格を把て、此宗を格量する者は、徒  
 に枝派を擲して、事を執の迷を免れず。 【名山廣錄】  
 唐の宣宗帝、薦福の弘辨禪師に問、禪宗に何ぞ南北の名

禪の三宗

あるや、師云、禪門本より南北無し、昔如來正法眼藏を以  
 て大迦葉に付す、展轉相傳て二十八祖達磨に至て、此方  
 に來遊して、乃ち初祖となる、五祖の忍大師、蘄州の東山  
 に在て、開法せし時に、泊々二弟子あり、一を慧能と名け、  
 受衣傳法して、嶺南に歸て六祖と爲る、一を神秀と名け、  
 湖北の玉泉に在て、化を揚ぐ、其後、秀の門人普寂、秀を立  
 て第六祖と爲て、自ら七祖と稱す、傳法する所一なりと  
 雖、而も、開道發悟に、頓漸の異あり、故に南頓北漸と云ふ、  
 禪宗本より南北の稱有に非ず。 【禪林類聚】  
 禪の三宗と云は、一には息妄修心宗、二には泯絕無寄宗、  
 三には直顯心性宗なり、教の三種とは、一には密意依性  
 說相教、二には密意破相顯性教、三には顯示直心即性教



五家七宗なし

なり。

【聖】諸人者、五家七宗と對論すること無く、只當に心を明むべし、是即ち諸佛の正法なり、豈人我をもて争はんや。

【聖】山傳光錄

教禪各宗の判斷

【聖】譬ば四序の一歳の功を成じて、春夏秋冬の令別ならざるが如し、其別なること能はざる所の者は一歳の功なり、密宗は春なり、天台賢首慈恩等の宗は夏なり、南山の律宗は秋なり、少林單傳の宗は冬なり、理に就て之を言ば、但禪のみ諸宗の別傳たることを知て、諸宗も亦禪の別傳なることを知らず、會して之に歸すれば、密宗は乃一佛大悲拔濟の心を宣ふなり、教宗は乃一佛大智開示の心を聞くなり、律宗は乃一佛大行莊嚴の心を持つなり。

五宗

【聖】禪宗は乃一佛大覺圓滿の心を傳ふなり。

【山房夜話】

【聖】曹溪の道は、南嶽石頭江西馬祖に至り、然して分れて兩宗と爲る、雲門曹洞法眼は、皆石頭を宗とす、臨濟滌仰は、皆馬祖を宗とす、天下の叢林號して五宗と爲す。

【僧寶傳】

五家概評

【聖】僧問ふ、如何なるか、是臨濟下の事、師云く、一刀兩斷、如何なるか、是雲門下の事、師云く、三句縱橫、如何なるか、是曹洞下の事、師云く、五位君臣、分付を設く、如何なるか、是滌仰下の事、師云く、進前退後、商量を絶す。

【圓悟佛果禪師語錄】

五家とは其

【聖】五家とは乃ち五家其人なり、五家其道には非ざるなり、



人なり

乃至、或人謂く、五家の分る、人の盛んなるに止らず、就中各々宗旨同じからざるあり、幻曰く、不同に非ず、大同にして、小異のみ、大同とは、少室の一燈に同じく、小異とは、乃ち言語機境の偶々異なるのみ、漏仰の謹嚴、曹洞の細密、臨濟の痛快、雲門の高古、法眼の簡明、各々其天性に出で、父子の間、故歩を失はず。

【山房夜話】

五家の宗要は一なり

五家の別風

夫五家の宗は、我宗乗向上の大事を傳んと欲する而已、然るに、只世間流布の文字を教訓して、妄に解して、以て要と爲す、故に、宗祖各々其宗の要路を教訓して、門戸を分ち、自ら五の一宗風と爲る、知るべし、根本は、只向上の大事なることを、五家は、即ち差別の要門なり。

第一臨濟の機鋒を戦はしむるに、亦全提半提の別あり、

全提半提の別

宋元の禪風

第二雲門の言句を擇ふに、亦全提半提の別あり、第三曹洞の心地を究むるに、亦全提半提の別あり、第四漏仰の作用を明すに、亦全提半提の別あり、第五法眼の利濟を先に、するに、亦全提半提の別あり。

全提と曰ふは、如來の正法眼藏、全分に荷擔受用するの義なり、半提とは、未だ全提に及ばず、或は半、或は十、が一に及ぶ者なり、半提の言類多くして、分ち難し、學者半途に止て、窮竟と爲す者、誠に憐愍すべきか、五家要路】

直指の宗、唐に盛んに、宋に衰ふ、元に至て、五燈の嗣を失するもの三、唯臨濟、曹洞の二燈、僅かに存す、然れども、臨濟は之を得ること、痛快に在て、之を失ふこと、鹵莽に在り、曹洞は之を得ること、綿密に在て、之を失すること、廉



織に在り、鹵莽廉織に至て流風の餘韵息むに幾し。

【禪餘外集】

臨濟曹洞の眞偽

臨濟の痛快は、今日滂浪に流蕩し、曹洞の綿密は、今日下劣に沈没す。下劣は曹洞の綿密に非ず、滂浪は臨濟の痛快に非ず。

【獨華護法集】

雲門宗と臨濟宗及其弊風

古に曰く、雲門は言句を以て救ひ、臨濟は機鋒を以て救ふと、其實は然らず。今雲門の妙唱あつて若臨濟の大機なくんば、恰も天子の位あつて將軍の威なきが如し。其弊畢竟して玄微に墮せん、玄微變じて細膩と作らん、乃至臨濟の大機あつて若雲門の妙唱無くんば、卻て將軍の威あつて天子の位なきに似たり。其弊畢竟して嶮奇に墮せん、嶮奇轉じて麤強と作らん。今時の諸禪蓋ね之

を出でず、彼の雲門臨濟の如き、皆是の如くならず、已に能く大機妙唱の外に超出して、亦大機妙唱の内に遊戲す。其弊なるに及んでは、遊戲の跡を認て窠窟を成ずるが故に、只我臨濟興化風穴の諸祖より、傍に雲門の提唱を挾て、宗風一轉して佛法日に新なり。

【宗門無盡燈論】

臨濟宗

臨濟の一宗………公案を體と爲し、言句を衣と爲し、心地を宗と爲し、體用を行と爲し、利濟を旨と爲す。

【五家要略】

臨濟と滂仰

粹は能く家を保ち、剛は能く家を破る。是理の必然なり、徳山臨濟は乃ち破家の子なり、滂仰父子は眞に保家の兒なり。保する時んば、侵々として微に入ること免れ



四料揀

臨濟 雲門

濁仰宗の嶮

濁仰宗

ず破する時んば然して後に能く建立する所あり此勢  
力の必然なり。

⑤ 四料揀四賓主三句あり皆吾臨濟の宗旨なり黄檗より  
得來るに非ず。 【大光明藏】

④ 臨濟は自在縦横を以て宗旨と爲し濁仰は事理不二を  
以て宗と爲し雲門は意下截斷を以て宗と爲す。 【人天眼目註】

③ 濁仰の宗風審細にして老婆臭乳に似たりと雖も宗旨  
の嶮なることは他師に過ぐ。 【五家要路】

② 濁仰の一宗は多く體用を論ず體は即ち百丈の處にし  
て得る所の火種是なり用は即ち一生の光明煥發する  
是なり。 【大光明藏】

五家の同別

宗風に高下なし

五家は一相傳のみ

分派は訛謬なり

① 八宗皆人を利するを以て究竟と爲す五家共に學者を  
導く是基本なり宗旨は高を以て貴と爲すと雖も其教  
示する所自ら高下前後の分あるのみ。

④ 法眼を殿後に爲し臨濟を先鋒と爲す其優劣を其際に  
容れんや雲門を天子と爲し濁仰を公卿と爲す須く知  
るべし宗風高下なきに非ざることを。 【五家要路】

③ 曹洞臨濟の傳法相續するものは曹洞の法に非ず臨濟  
の法に非ず五派皆如來の正法眼藏を以て佛祖に代て  
遞代相傳ふるなり。 【獨菴護法集】

② 參學の人須く邪正を知べし所謂優波鞠多已後五部の  
佛法と稱するは乃西天の陵替なり青原南嶽已後五家  
の家風を擅にするは乃東地の訛謬なり。 【永平廣錄】

の家風を擅にするは乃東地の訛謬なり。 【永平廣錄】



儒教と  
佛敎

○孔孟の教は名實かね用て廣く天下を利す、仁義忠恕は一性の化する所、老莊の教は名を破りて實に就き單に道德を究む、虚無自然は一性の化する所、是を以て孔孟未だ曾て仁義忠恕を以て道と爲さず、老莊は未だ曾て虚無自然を以て道と爲さず、強て名て要路を開くのみ、是其窮竟たる所以にあらす、是故を孔子の曰く、博學多識に爲んか、吾道一以て之を貫けりと、老子の曰く、常に無にして以て其妙を觀んと欲す、常に有にして以て其微を觀んと欲すと、孔孟は能く教て治む、老莊は能く治て教ゆ、佛は能く教へ能く治む、孔孟は老莊を以て厚し、老莊は孔孟を以て至す、二教は佛を以て微し、佛は二教を以て助く、孔孟の化は廣く老莊の化は深し、佛の化は

禪宗の稱な  
し只佛の正  
法のみ

第四章 禪宗の名稱

○圓明なり、孔老の教化は智一世に通じ、但人民を利して未だ異生に及ばず、諸佛の智慧は廣大無邊にして六度四生物として利せずと云ことなし、三世十方事として通せずと云ことなし、且廣狹偏圓の異ありと雖も其旨趣は一のみ。

【宗門無盡燈論】

○哀むべし、哀むべし、邪魔魍魎野獸畜生狼に禪宗と號して雌雄を法華華嚴等の宗に論ず、澆季人無き所以なり、佛祖の單傳は唯是我釋迦牟尼佛の正法なり、阿耨多羅三藐三菩提なり、所以に須く知べし、佛法の中に法華華嚴等有り、法華華嚴等の各の外別に祖師道あるに非る



なり、所以に諸宗と比肩すべからず、唯國の王を得が如し、無上菩提の爲に道を求るの輩、佛祖單傳直指無上の正法を以て禪宗と稱すべからざるが如し、若し禪宗と稱せば佛祖の兒孫に非ず、又見毒あるべし、良久して曰、佛法本名相の表に非ず、後人謬て許多の名を立す、少林の面壁、縦ひ相似も禪宗と號して有情を惑ふこと莫れ。

【永平家訓】

○ 猥に過て云く、佛祖正傳の正法眼藏涅槃妙心、猥に是を禪宗と稱す、祖師を禪祖と稱す、學者を禪子と號す、或は禪和子と稱し、或は禪家流の自稱あり、是皆僻見を根本とせる枝葉なり、西天東地、從古至今、未だ禪宗の稱あらざるを猥に自稱するは、佛道を破る魔なり、佛祖の招か

禪祖禪和子と稱すべからず

宗名の起源

ひたしけ  
てとは出  
放題にウ  
ワサする  
ことなり

禪那は佛法の總要なり  
禪宗と號す

ざる怨家なり。

○ 此禪宗の號は神丹以東に起れり、竺乾には聞かず、始め達磨大師嵩山の少林寺にして九年面壁の間、道俗未だ佛正法を知らず、坐禪をする婆羅門と名け、後代々の諸祖皆常に坐禪を専す、是を見る愚なる俗家は、實を知らず、ひたしけて坐禪宗と云き、今の代には坐の語を簡して只禪宗と云なり。

【正法眼藏】

○ 縦ひ禪那なりとも、禪宗と稱すべからず、況や禪那は未だ佛法の總要に非ず、然あるを佛々正傳の大道を殊更禪宗と稱する輩、佛道は未夢見在なり。

○ 禪宗を自號する輩にも、佛法あらんと聽許すると莫れ、禪宗の稱誰か稱し來る、諸佛祖師の禪宗と稱する未だ



古佛祖に禪宗なし

達磨宗は妄心宗は妄稱なり

一定せよ 五家の亂稱

あらず、知るべし禪宗の稱は魔波旬の稱するなり。

⑥ 世尊迦葉の會に禪宗の稱聞へず、初祖、二祖の會に禪宗の稱聞へず、五祖、六祖の會に禪宗の稱聞へず、青原、南嶽の會に禪宗の稱聞へず、何の時より誰人の稱し來るとなし、學者の中に學者の數に非ずして、ひそかに壞法盜法の輩稱し來るならん。

⑦ 大宋の近代、天下の庸流、此妄稱禪宗の名を聞て、俗徒多く禪宗と稱し、達磨宗と稱し、佛心宗と稱する、妄稱聞へ風聞して、佛道を亂らんとす。

⑧ 嘗て禪宗と稱せずと一定すべきなり。

⑨ 明かに五宗の亂稱なる旨を知りぬべし、然れば則ち大宋國の佛法盛なりし時は、五宗の稱なし、五宗の稱を

門風の妄稱

七佛の嗣に

非狂惑の妄稱

禪宗と正法眼藏

擧揚して、家風を聞ゆる古人未だあらず、佛法の澆薄より、以來、猥に五宗の稱あるなり。

⑤ 切忌すらくは、五家の亂稱を記持すること莫れ、五家の門風を記號すること莫れ。

④ 佛道に五宗ありと學するは、七佛の正嗣にあらず。

③ 五宗を立して、各の宗旨ありと稱するは、誑惑世間人の輩、少聞薄解の類なり。

③ 臨濟未だ吾禪宗を滅却することを得ざれと云はす、吾臨濟宗を滅却することを得ざれと云ふ、明に知べし、佛祖正傳の大道を禪宗と稱すべからず、臨濟宗と稱すべからずと云ふことを、更に禪宗と稱することゆめくあるべからず。



法眼宗

曹洞宗

黃龍派

一心と禪

④ 法眼宗に孝せん人は、此法眼宗の稱を稱すること莫れ。  
 ⑤ 曹洞宗の稱は、傍輩の臭皮袋己に齊肩ならんとて曹洞宗の稱を稱するなり。  
 ⑥ 黃龍の南禪師の一派を稱して黃龍宗と稱し來れりと云へども其派遠からずあやまりを知るべし。

【正法眼藏】

⑦ 禪とは一心佛性の名なり専ら心地明了なるを以て禪宗と云へり。

【澤水假名法語】

### 第貳 教義篇

#### 第一章 宇宙

##### 第一節 萬有の起滅

萬有と一心

一念と世界

心と十方

① 山河大地以及無邊の虚空之を萬法と謂ふ此萬法は全く泡影の虚幻不實なるに同じ皆一心の變現する所を出でず。

【禪餘内集】

② 一念の心一切世間出世間の法を含攝して悉く備へざるること無し然も此の諸法一心の中に於て炳然として顯現す。

【宗鏡錄】

③ 一切世間の諸の所有の物皆即菩提妙明の元心なり心精徧圓にして十方を含裏す。

【首楞嚴經】



妄心  
心の所現

④ 三界は別の理なし、但是妄心より生ず。【宗鏡錄】

⑤ 三界は唯心なり、森羅萬象は一法の所印なり、凡そ見る所の色は、皆是心を見る、心の所生に於て即ち名て色と爲す。【馬祖道一禪師語錄】

想念

⑥ 皆想より萬品を生ず、始終常に寂たり、盡く念に因て一眞を起す。【註心賦】

五大

⑦ 夫地水火風空の五大を以て、今の世界を成立す、只世界の

【自受用三昧】

萬有無體

のみならんや、人身も又然り。【自受用三昧】

如來藏

⑧ 一切の諸法は皆無し、自體悉く堅牢ならず、唯想より生ずればなり、若し執して實と爲るは、但是顛倒なり。

⑨ 佛敎の意は、如來藏性轉變して識藏と爲るを以て、識藏より根本器世間一切の種子を變出す、其化の本を推す

天人一如

⑩ 即ち如來藏性を以て始の物と爲す。【宗鏡錄】

蟻ほどの小なる虫と思へども、廣き天地の積に少も變らず候、まして人間牛馬などの類、皆天地を縮めて作りたる物にて候へば、合て天地に少も違無候、乃至然により、春は人の心も春に成り、秋は人の心も秋に成り、空曇れば人の氣も曇り、空晴れば人の氣も晴るなり。

【澤庵禪師法語】

妄心

⑪ 此妄心は能一切境界の原主たり。

心と萬有

⑫ 一切の諸法は心よりして起る心と相和合することを作て有なり。

其二

⑬ 法界の染淨萬類萬法一心を出でず。【宗鏡錄】

其三

⑭ 一切の諸法は皆空にして幻の如し、和合よりして有、作



其四

其五

主観の干客  
観の干客  
覺は本覺  
に心して主  
観の心なる  
云ふ明は  
境に明は  
客観の物  
を云ふ物  
本來即寂

者あること無し、皆憶想分別より起て主あること無が故に意に隨て出づ。

⑤ 一切の外境は幻心より生ず、豈獨り心を滅して幻色を存せんや。

⑥ 一切の萬法は皆是心の成なり。

⑦ 覺は所明に非れども、明に因て所を立す、所既に妄に立すれば、汝が妄能を生じて同異なき中に熾然として異を成す、彼の所異に異にして、異に因て同を立す、同異發

明すれば、此に因て復無同無異を立す、是の如く擾亂し、相待して勞を生ず、勞すること久ければ塵を發して自

相待して勞を生ず、勞すること久ければ塵を發して自

ら相渾濁す、是に因て塵勞煩惱を引起す、起なるは世界を異

となり、靜なるは虚空と成る、虚空を同と爲し、世界を異

となり、靜なるは虚空と成る、虚空を同と爲し、世界を異

となり、靜なるは虚空と成る、虚空を同と爲し、世界を異

となり、靜なるは虚空と成る、虚空を同と爲し、世界を異

靜の本覺  
が眞無明  
の爲に萬  
像を生ず  
相狀を説き  
たる者なり  
起とは動なり  
り所は影  
明なり能  
妄覺なり此  
二は共に無  
明にして法  
界に迷ふて  
空昧と成る  
搖とは刹那  
生滅するを

となす、彼の無同異は眞の有爲の法なり、覺明と空昧と相對して、搖を成す、故に風輪ありて世界を執持す、空に因て搖を生じ、明を堅して、礙を立す、彼の金寶は、明覺に堅を立するが故に、金輪あつて國土を保持す、覺を堅して、寶成し、明を搖して、風出づ、風金相摩する故に、火光有て變化の性と爲る、寶明、潤を生じ、火光上り、蒸す、故に水輪有て十方界を含む、火は騰り、水は降て、交に發して、堅を立す、濕へるは、巨海と爲り、乾るは、洲渾と爲る、是の義を以ての故に、彼の大海の中にも、火光常に起り、彼の洲渾の中にも、江河常に注ぐ、水の勢ひ、火よりも劣なる時は、結して高山と爲る、是故に、岩撃ときは、燄と成り、融る時は、水と成る、土の勢ひ、水よりも劣なる時は、抽で、草



云ふ

心の狂亂と  
妄見

天地の始終

萬象と一心

木と爲る是故に林藪燒に遇ば土と成り絞るに因ては  
水と成る交妄發生して邊に相種と爲る是の因縁を以  
て世界相續す。

⑥ 汝が無始より心性狂亂するに由て知見妄に發す妄を  
發すること息ざれば見を勞て塵を發す目睛を勞すれ  
ば狂華あるが如し湛精明に於て因なく一切の世間山  
河大地を亂起す生死涅槃皆即狂勞顛倒の華相なり。

【首楞嚴經】

⑤ 四輪とは何の謂ぞ風と曰ひ水と曰ひ金と曰ひ地と曰  
ふ四輪は天地の形を成す所以なり四輪を觀て天地の  
終始知るべきなり。

【輔教編】

④ 萬象森羅たゞ一法の印する處なり一法と云ふは一心

萬像の主

起滅

一切と一心  
三界唯心

三界と三毒

なり。

③ 傳大士の偈に云く物あり天地に先つ形無して本寂寥  
能萬像の主と爲て四時を逐て凋まず。

【禪林類聚】

② 心生すれば種々の法生じ心滅すれば種々の法滅す。

【雲門廣錄】

① 一切は一心より生ず。

【法燈國師法語】

④ 三界は心より生じ萬法は識より成る心と識とは本一  
物なれども心に事を生じ其事明かに分れて思ひ取る  
時を識と云ふ。

【指月禪師法語】

③ 貪を欲界と爲し嗔を色界と爲し癡を無色界と爲す若  
一念の心生すれば即ち三界に入り一念の心滅すれば  
即ち三界を出づ是に知りぬ三界の生滅と萬法の有と



萬有と心

無とは皆一心に由ることを。

⑤ 心は萬法の根本にして、一切の諸法は唯心の所生なり、若し能く心を了る時は即ち萬法俱に備る、猶大樹の所有枝條諸の花果皆悉く根に依て始て生ずるが如じ、樹を伐り根を去るに及んで必ず死る、若し心を了じて道を修むる時は即ち力を省て成じ易し、心を了せずして善惡は皆自由に由ることを、心外別に求むとならば、終に是處無し。

【少室六門】

⑥ 諸の因及縁と此より世間を生ず。

【楞伽經】

因縁其一

⑦ 善男子、我諸の諸行を見るに悉く皆無常なり、云何が知るや、因縁を以ての故に、若し諸法の縁より生ずる者あ

其三

らば、則ち無常なることを知る、是諸の外道一法として縁より生ぜざることあることなし。

【大涅槃經】

其四

⑧ 因で盡くは大沙門の説なり。

【俗像功德經】

其五

夫縁より有る者は始終に成壞す、縁より得るに非ざる者は、歴劫に常に堅し、堅き時は則ち在り、壞する時は則ち損つ。

【禪林類聚】

生滅起伏

⑨ 一切の法生ずるも因縁に屬し、一切の法滅するも因縁に屬す。

【雲門廣錄】

⑩ 夫生ある者は必ず死あり、此固に人の共に知る所なり、但未だ生じて嘗て生せず、死して未だ嘗て死せざる者あることを知らず、此乃ち水火の能く劫する所、刀兵の



法は不生なり

萬法に自性なし

其二

能く傷る所に非ざる者なり、譬へば鏡影は往來して、鏡體は動せず、海波は起伏して、海體は常に安きが如し、其常安不動の體に達する時は、則ち彼岸に超登し、其往來起伏の用を執する時は、則ち流浪窮らず。【鼓山晚錄】

③ 大慧よ、一切の法は所作の因縁を離て不生なり、作者なきが故に、一切の法は不生なり、大慧よ、何故に一切の性は自性を離る、自覺を以て觀する時、自共の性相不可得なるが故に、一切の法は不生なりと説く。【楞伽經】

④ 諸法は幻の相にして、自性なし、他性なし、本自ら燃えず、今則ち滅すること無し。

⑤ 法は有ならず、亦無ならず、因縁を以ての故に諸法生ず、

【維摩經】

其三

其四

清淨なる宇宙

虚妄の世界

⑥ 諸法眞實の相は有ることなし、生せず、滅せず、常に非ず、斷に非ず、一に非ず、異に非ず、來に非ず、去にあらざるなり。【梵網經】

⑦ 投子の大同禪師、僧問ふ、萬法一より生ず、未審し一法又何よりか生ず、師云く、首を回して看よ。【禪林類聚】

**第二節 萬有の本性**

① 十方の國土、皎然として清淨なること、譬ば瑠璃の内に寶月を懸けたるが如し、身心快然として妙圓平等にして、大安穩を獲たり。【首楞嚴經】

② 世間の萬法は、心境の兩種を出でず、心あるに非ず、境に因て生ず、境あるに非ず、心に因て得たり、一獨り成らず、二單に立たず、知べし、全く虚妄たることを。



萬有と佛

眞如の法性

世界に迷悟なし

佛性  
物我一如

【禪餘内集】

③ 山も法性なり、河も眞如なり、一草も佛身なり、牆壁瓦礫も佛心なり。

④ 世間の依正の法を以て佛法には是を眞如法性と云ふ、是をば世間の法の外に心得むは、萬劫千生にも心得べからざるなり。

【禪戒鈔】

⑤ 草木國土十方世界常住一相の心にして、終に迷も悟もせぬ物なり。

【正眼國師法語】

⑥ 天地の萬物一々佛性を具す。

【澤水假名法語】

⑦ 天地と我と同根萬物と我と一體にして、微塵ばかりも別の物なし、溪の聲も、風の音も、主人公の聲なり、松の青も、雪の白も、主人公の色なり、我手をあげ、足を動かし、色

心法一如

佛心と世界

其二

其三

其四

を見、聲を聞くものと全く別ならず。

【拔隊假名法語】

⑧ 心が法界に行て法界に成にも非ず、又法界が心の中に來て法界が心に成にても無し、自ら互に同じものなり、萬格別と思ふべからず。

【十二時法語】

⑨ 盡十方世界總て是一個の無量光の佛身なり、盡十方世界總て是一個の蓮花の寶土ならん。

【鼓山晚錄】

⑩ 所謂佛道には、盡地皆心なり。

⑪ 草木國土これ心なり。

⑬ 所謂正傳し來れる心と云ふは、一心一切法、一切法一心なり。乃至心とは山河大地なり、日月星辰なり。

【正法眼藏】



萬象と心性

③一切諸法、萬象森羅共にたゞこれ一心にして、こめずかねざることなし、諸の法門皆な平等一心なり、敢て異違なしと談ずる、是即ち佛家の心性を知れる様子なり。

【正法眼藏】

妙理

④萬物は妙理に非ずと云こと無し、何ぞ管見に局して太旨に迷はんや。

【宗鏡錄】

自性なし

⑤一切の法は因縁和合の故に自在ならず、自在ならざるが故に自性なし、自性無が故に我なし。

【宗鏡錄】

唯心と分別

⑥未だ境は惟心なりと達せざれば種々の分別を起す、境は唯心のみと達すれば、分別即生せず、分別既に生ぜずんば、便ち外塵の相を捨てん。

【佛眼語錄】

佛世界

⑦所謂世界は、十方皆佛世界なり、非佛世界未だあらざる

世界と自己

⑥山河大地、日月星辰、總て汝が心を出でず、三千世界都來是汝自己なり。

【正法眼藏】

宇宙の文字

⑤廣大の文字は萬象にあま。りて、ゆたかなり、轉大法輪もまた一塵に攝まれり。

【傳心法要】

山河其儘妙法

④草木牆壁も法を施す、天地萬法も正法を與ふるなり、正修行の時、谿聲谿色、山聲山色共に八万四千偈を吞まざるなり、自己若し名利心を不惜すれば、谿山また恁麼の

【正法眼藏】

不惜あり。

一物萬法を

③一性圓に一切の性に通じ、一法偏く一切の法を含む、一月普く一切の水に現し、一切の水月一月に攝す、諸佛の法身我性に入り、我性同く如來と合す。

【永嘉集】



成佛の道場

③ 處々本來虚幻の國。家々悉く是れ無量光。行に臨で戀ふこと莫れ毒蛇の窟。順逆都て成佛場と成る。

【獨庵護法集】

萬法一如

④ 一切衆生は皆如なり、一切法も亦如なり、衆の賢聖も亦如なり。

【維摩經】

差別と一心

⑤ 諸法萬差なれども一心を離れず。夫五濁の凡區と極樂の淨土と總して是浮走幻影にし。

【大應假名法語】

泥團子

て眞實あると無し、若其實體を窮むる時は、即ち身心世界一如に非すと云ふとなし、本變易なし、正に今日雲迷ひ霧集て、大雨淋漓たれども、天は實に未だ嘗て動着せず、悠忽の間に雲收り霧散して、果日空に當れども、天は亦未だ嘗て動着せざるが如し、但此一一如の體容易に擬

議すべからず、若只情議の中に在てト度して隠々地に個の物有を見れば、則祗だ是れ一個の泥團子にして了らん。

【鼓山晩錄】

第三節 萬有の状態

① 當に知るべし、世は皆無常なり、會へば必ず離るゝことあり、憂惱を懐くこと勿れ、世相是の如し。  
② 假令妙高山も劫盡れば皆散壞す、大海深して底なきも、亦復枯渴することあり、大地及日月も時至れば皆盡るに歸す、未だ會て一事として無常に吞れざるはなし。

【遺教經】

【無常經】

③ 世諦流布の族は幻化無常の諸法を實に常住と計較して、世利の得失に閑を得ず、深く久しく頼をかけて、違順



に隨て或は喜び或は愁ふ汝が四大五蘊さへ東岱北邙の露と消え失せて我物と執するもの微塵ばかりもなきものを我あり顔に悠然として明し暮す況や身より外の國城妻子田宅莊園金玉衣服にいたるまで我が物と思ひ留むる程淺間しきことはあらじ。

【光明藏三昧】

④ 有爲の法は其性無常なり生じ已て住せず。

【大涅槃經】

⑤ 一切有爲の法は夢幻泡影の如く。露の如く。亦電の如し。應に是の如きの觀を作べし。

【金剛經】

⑥ 世間は無常なり一切住らずたとへば夢幻泡影の有に似て實無が如し。

【月庵假名法語】

其三

其四

其五

其六

無常

三毒と三界

宇宙の組織

⑦ 佛目連に告ぐ譬ば萬川の長流に浮べる草木あらんに前は後を顧みず後は前を顧みず都て大海に會するが如し世間も亦爾り豪貴富樂の自在なるありと雖悉く生老病死を免るゝことを得ず。

【目連所問經】

⑧ 百年の富貴一場の榮 風は落花を攪て春夢驚く。

【見桃錄】

⑨ 汝が一念心の貪是欲界汝が一念心の嗔是色界汝が一念心の癡は無色界。

【慧照禪師語錄】

⑩ 夫生死輪廻は衆生の苦報なり出離解脱は諸佛の樂果なり所謂生死輪廻とは三界の中六道の間凡そ識あり形ある者生死の無はなし欲界色界無色界是を三界と云ふ地獄餓鬼畜生修羅人天是を六道と云ふ所謂天に



其數廿八あり、四天王天、忉利天、須臾摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天、是を欲界の六天と云ふ、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人の五と、此六天とを合して欲界と稱す、其中此六天は天の部なり、故に六天と號す、色界の十八天、無色界の四天を加へて二十八天なり、此三界六道の間には大身の衆生あり、小身の衆生あり、齡に長短あり、位に尊鄙あり、貧富苦樂區々なる、其品勝て計ふべからず。

【臨在家語】

萬有の平等

② 金にて様々の物を作りたるが如し、其形より之を見れば、鬼は恐ろしく、佛は貴し、老いたるは形しばみ、若きは顔うるはし、鶴ははき長く、鴨はあし短し、松は直く、蕨は曲り、柳はたをやかに、花はみやびやかなり、金の方より

之を見れば鬼もこがね、佛もこがね、男女の差別もなく、君臣の高下もなく、鶴の長きも金なれば鴨の短きも金なり、花も柳も松も蕨も只一體の金にして、露ばかりも差別はたて難し。

【鐵眼假名法語】

③ 雲中にも有情世界あり、風中にも有情世界あり、火中にも有情世界あり、地中にも有情世界あり、一莖草木にも有情世界あり、一柱杖中にも有情世界あり。

【正法眼藏】

有情と無情  
青はこれ青  
無差別

③ 青は是黄に非ず、長は是短に非ず、諸法各々自位に住す。

【拈評三百則】

④ 萬法本より差別なし、乃至萬法もとより不生不滅なり。

【月庵假名法語】



神心爽快

⑤心地平にして世界平なり、若し霧を拂ひ以て天を披くが如きは、神襟頓に爽かに、雲を撥て日を見るに似て、法眼恒に清し。

【註心賦】

第貳章 人生

第一節 人生の状態

人生の罪惡

①夫人身を得る者は、爪甲の土の如く、人身を失ふ者は大地の土の如し、今幸に得難の人身を得、何ぞ此正法を聞かざるや、汝等往々生死を恐れず、因果を明めず、悠悠として、只目前の境界を逐て、身後の消息を念はず、汝が所謂種々の財寶を求めて、自分を資益するが如きは、是飢寒の患を恐るゝにあらずや、胡爲ぞ輪廻の患を恐れざる

汝が所謂種々の方便を設て、利養を貪求するが如きは、是尊貴の樂を戀ふにあらずや、胡爲ぞ解脱の樂を求めざる、嗚呼咄哉、一切衆生、上は僧道より、下は塵俗に至る迄、本を捨て、末を逐ふ、總て面目なし、或は煩惱に役せらるゝとを被り、互に好醜を論じて、横放縱逸、惡として造らずと云ふとなく、煩惱は身心を誑すに過すと云ふを願す、或は衣食に役せらるゝとを被り、互に精麤を論じて、殺生偷盜、惡として造らずと云ふとなく、衣食は飢寒を免るゝに過すと云ふを願す、或は金穀に役せらるゝとを被り、互に得失を論じて、妄言綺語、惡として造らずと云ふとなく、金穀は自他を養ふに過すと云ふを願す、或は勢位に役せらるゝとを被り、互に尊卑を論じて、貪欲瞋



大悪として造らずと云と無く、勢位は上下を治るに過  
 ずと云とを顧ず或は文字に役せらるゝとを被り互に  
 是非を論じて憍慢嫉妬悪として造らずと云と無く、文  
 字は古今を過察するに過ずと云とを顧ず或は經法に  
 役せらるゝとを被り互に淺深を論じて勝負の人我悪  
 として造らずと云と無く、經法は道德を明むるに過ず  
 と云とを顧ず或は禪門に役せらるゝとを被り互に邪  
 正を論じて見網教惑悪として造らずと云と無し、禪門  
 は言句を疑ふに過ずと云とを顧ず皆是根本に歸せず、  
 錯て前境を逐ふが故に、展轉して是の如く、終に地獄餓  
 鬼畜生に墮するを致す、因果歴然として、影の形に隨  
 ふが如し、汝但其心質直にして邪曲の心無んば、佛法什

【宗門無盡燈論】

衆生の意義

人間の三階級

塵の難きことかあらん。  
 【宗門無盡燈論】  
 衆生とは何の義ぞ、佛の言く、これ情想の和合なり、所謂  
 地水火風空識名色界入の縁起及因果業果會對して生ず  
 るが故に。  
 【證契大乘經】  
 古來三等の人あり、一人は善を善として行ふと能はず、  
 惡を惡として去ると能はず、一人は勉て善を行ひ、勉て  
 惡を去る、一人は善を行ふて善を忘れ、惡を去て惡を忘  
 る、これ第一人は智ありて勇なく、悶々として憂ふ、次の  
 一人は智あり、勇あり、察々として苦む、復次の一人は智  
 を用ゐ、勇を用ゐて兼て仁を用ゐ、穆々として安し、安ん  
 ずるものは上なり、苦しむものは中なり、憂ふるものは  
 下なり。

【田山廣錄】



人生の十二  
因縁

④ 夫本心暗きが故に種々の業を作る、これ無明と行との二つなり、業積りて習性となる、其父母に縁じて胎内に宿る、是識と名色となり、體形備つて六根漸く成るを六處と云ふ、出で生れて未だ好悪を少しも辨へざるを觸と云ふ、三歳の後は早や味を悦び、美しき色を愛する、是を受と云ふ、十歳以後財色を求むる心あるを愛と云ふ、十五六歳を過ては頻に貪著するを取と云ふ、廿歳より盛んに業を作して、罪を恐れざるを有と云ふ、此業を造り、罪を重ぬる中に未來の生處は善惡ともに定まるを生と云ふ、一生此の如きの業のみ作りて老い衰へて死する、これを人間の十二因縁と云ふ、業に引かれ、縁に隨ふて如何なる生を受け如何なる身とならんも計り難

人と迷惑

し、然れば今の親子夫妻の至て親しき者も、別れては何國にありて何となりてあらんも知らず、骨肉の親みも唯五十年の間なり、譬へば一夜の宿りも友を以て、深く愛し、餘の人を指し憎むが如し、一夜明けて宿を立出れば、其友は東西に散りて我獨り行く先の憎みたる人にも、又其夜の友となる、唯頼むべきは菩提なり、求むべきは佛果なり。

⑤ 凡夫は色を見ては色に迷ひ、聲を聞ては聲に迷ひ、冷暖を覺えては冷暖に迷ひ、逆順を知りては逆順に迷ふ、是を衆生の外に向ふと云ふなり。

⑥ 我佛眼を以て六道の衆生を觀るに、貧窮にして福慧なし、生死の險道に入りて相續して、苦斷ず、深く五欲に著

【快馬鞭】



人の大苦惱

すると犂牛の尾を愛するが如し、貪愛を以て自ら蔽ひ、  
盲瞑にして見る所なし、大勢の佛及び斷苦の法を求め  
ず、深く諸の邪見に入りて苦を以て苦を捨てんと欲す。

【法華經】

⑦ 世人、無始より時來大苦惱あり、身心を惑亂して出離を  
求めず、大に苦む所の者は、姪欲の事なり、此苦能く精神  
を昏塞して性命を賊し徳を障へ、道を敗りて修行を妨  
廢す。

【叢林盛事】

人生の十苦

⑧ 人に十苦の逼迫せらるゝあり、一には生苦、二には老苦、  
三には病苦、四には死苦、五には愁苦、六には怨苦、七には  
受苦、八には憂苦、九には病惱、十には流輕の大苦なり。

【菩薩藏經】

世は水沫の如し

⑨ 世は皆牢固ならざると、水沫泡焰の如し、汝等咸く應に  
厭離の心を生ずべし。

【法華經】

悲喜苦樂

⑩ 咲く花を見て樂を思へば、散る時はやがて苦なり、出る  
月を見て樂しめば、入る山の端は又かなし、逢ふとを喜  
べば、別れば却て憂ひなり、榮えたるを樂しむ人は、衰ふ  
る時はまた苦しむ、貧しき人は無を苦しむ、富める人は  
有になやまさる、へつらふも苦みなれば、おごるも苦し  
きわざ、戀しきも苦なれば、うらめしきも亦苦なり、大な  
るかな苦樂の二受、三界一切の衆生、その中におぼれて  
終に出づると能はず。

【鐵眼假名法語】

妄想の火

⑪ 百億の三千大千世界も衆生の妄想より起り、一百三十  
六の地獄も人々の妄想より作り出せり、我と妄想の火



死し茫ぼう々々として

少すく苦く多おほく樂らく

を起して、百千萬劫、その火に身を焦がすは、淺ましき凡夫のありさまなり。

【鐵眼假名法語】

③ 諸の貪欲執心深く、名聞利養甚だしく、只だ今生のとはかり思ふてあけくれ、妻子眷屬衣食財寶の營みに心を盡すばかりにて、時々に生死の到來し、念々に殺鬼の犯し責むるを知らず、病難忽ち至つて報命終らんとする時初て驚き後生たすからんとを思へども總てかなわじ、只茫々として死するのみなり。

④ 善につけても、惡につけても、人間のわざは苦多く樂少し、今の苦は即ち後の世の地獄餓鬼畜生修羅諸の惡道業となりて、我身を焼き焦すほむら、又きりさく劍なるべし、總て他人の仕出したる禍には非ず、只我心遣ひも

迷めい闇あんと法燈

身のふるまひも惡しきによりて、斯かる苦を受けて生々世々惡道に浮き沈むなり、縦ひ又人間に生れても位貴き人、富める者となり、或は天上に生れて萬の樂を受くれども、是も實の道心なくして、名利の爲に善根をなせし報ひなれば、一旦の樂みばかりにて、死すれば又惡道に落つ、是も始終樂しむべからず、これ皆善惡のかはりはあれども、心惡しく持つによつて直に佛法を覺らず、輪廻生死を免れざるものなり。

【月庵假名法語】

④ 夫以れば、一生は夢の如く、萬事は皆幻に似たり、厭ふべき者は生死の苦、悲しむべき者は自心の迷なり、身に生死あれども、生死の根を知らず、心に妄念起れども、妄念の源を辨へず、無明長夜の闇には、智慧の光を以て燈と



人心と世路

◎世路に夷險なし、夷險は心より起る、脚跟若し自ら穩かならば、山海坦然として平かならん。【禪餘内集】

難 人生二十の

◎佛の言く、人に二十の難あり、貧窮にして布施すると難し、豪貴にして道を學すると難し、命を棄て、必ず死すと難し、佛經を觀ると得ると難し、生れて佛世に値ふと難し、色を忍び、欲を忍ぶと難し、好を見て求めざると難し、辱かしめられて、嗔らざると難し、勢ありて臨まざる、と難し、事に觸れて、無心なると難し、廣學博窮なると難し、我慢を除滅すると難し、末學を輕んせざると難し、心行平等なると難し、是非を説かざると難し、善知識に會うと難し、性を見道を學ぶと難し、化度の人に隨ふと難し、境を觀て動かざると難し、善く方便を解くと難し。

無常

【四十二章程】

◎朝榮暮辱共に空と成る。今日の顔は昨日の紅にあら

火宅

◎百年三萬六千霜。盛者必衰、人常ならず。【見桃錄】

無常

【禪餘内集】

◎無常迅速なり、生死事大なり、且つ存命の際だ、業を修し

【隨聞記】

人生は幻寄

◎人生は幻寄なり、四大堅きに匪ず、百年漏盡きて終に鳥有に歸す、況んや百に満たずして中天する者、滔々として皆是なり。【黃檗清規】



造悪の病

凡夫の棲家

す、生死煩惱の病には正法の薬を以て是を療す、永く六道の苦を離るゝとを得んと思は、必ず信心堅固の力を勵ますべし。

⑤ 一切衆生は、一念の迷を起して、生死に沈みしより、身にも口にも意にも、皆造悪の病重し。

【枯木集】

⑥ 人ばかり賢からぬ者は、あらし、行住坐臥、苦み悲しみ、苦を忍び、知らぬ行末をなげき、ねたみ、そねみ、己を立て、物思ふ、悲しみながら世にからめらるゝ、此世一生は、兎や角と過ぬべし、來々世々、生をかへくして苦しめども捨つるとならず、眞に迷の深きなり。地獄餓鬼畜生修羅は世の中の凡夫の常の住家なりけり。

【無難假名法語】

人間界

⑦ 天上の果報と、富貴の人は、樂に誇つて穢土を厭ふ心なく、三途の苦報と、貧道の類は、苦に責られて、佛道を願事を忘たり、彼の苦樂の境、善惡の中間、是人界生也。

悲歎

⑧ 誠に一生は盡くると雖も、希望は盡すして、生を引續ぐなり、富める時は千の口、少なきを歎き、貧しき時は一身の多きを悲しむ、田ある者は田を嘆き、家ある者は家を歎き、妻子眷屬ある者は之を歎き、有につけても憂へ無につけても憂ふ、一生歎き、一期悲みて、終に其終なし。

【妻鏡】

喜憂の両面

⑨ 熟々世の暮なきならはし、新玉の年立かへる注連飾は、千代かけてさしそふ、初日影と壽きあへれども、僅かなる齡のはや一日を沈めて、終の薪の身をからし行く光



ならずや、松は蓬萊に引かれて、千年の蔭を失ひば、竹は左義長に焼かれて、百尺の緑を倒す、島海老の生ながら煮られて、さしも苦しげにかいまりたる姿にあやかれなどいへるは如何にぞや、田つり、數の子は、よしなき名の付たる故に、かばねをさらし、雉子の頭は生けるが如くも、たげしめ、鯛の尾は飛びかくるべくはねしむれども、何時しか落ち窪みたる眼のうち、うらめしげに牙齧いだしたる、聊か悦べる景色には見へず。

【れこるび草】

◎ 人々この世の假なると、この身の假なると、夢の如く泡影に似たり。

【澤水假名法語】

◎ 一生の榮華は風の前、の雲、百年の富貴は夢の中に取る

假りの世

風前の榮華

無常其

寶の如し、後生の道理を以て急ぎ心にかけて我が主を知り玉ふべし。

【夢窓假名法語】

◎ 上界の天衆の人間の命を見ると、蜉蝣と云ふ虫の朝に生れて夕を待たざるよりも、基なし、其身の賤しきと蟻にも劣り、蛙にも劣れり、此の如きの人身を愛し、人界に執心を留めて、淨土の快樂を願はざる事、蓼を喰む虫の甘き事を知らざるが如し、唯に樂にも苦にも一念隔つれば、昨夢の如し、月の影の移り易く、日の光の傾くに随ふて、無常の責の近づく事を知らず、市に入り巖に隠れし族も、生者必滅の理をば遁れず、雲に入り壺に入りし仙術も、命を愛して命を亡す類なり、誠に末の露、本の滴の後れ先立ち、老少不定の習、賢も死し、愚なるも留らず



其二

有為無常の理知り顔して驚くとなし。  
 凡そ生死無常は心に任せぬ習にて、二度人間に歸ると  
 希なり、老て又若きに歸るとなし、藏に満たる貯箱に餘  
 れる財も命を買ふとなし、業を償ふ賄賂とはならず、彭  
 祖が仙術淮南の神術徒に有為の境に留りて、法身の惠  
 命をば得ざりき、松樹千年終に是朽ちぬ、檜花一日の榮  
 に誇るとなかれ。

其三

時の鼓の音を聞け共、月日の影の移り易く、來し方、行末  
 の近付て、我身の老と成るを顧みず、人皆無常の理に迷  
 ひて、邪見の心を改めず、念々皆無常なり、諸法悉く自性  
 なし、眼の明なる者は、一期生滅を見、刹那生滅の謂れを  
 知りて、心を細にして見る時は、思ひと思ふ心成しと成

其四

す態、一法として無常に歸せずと云となし。【妻鏡】  
 人は言ふ春雨膏の如しと。我は道ふ春光箭に似たり  
 と。昨朝花は眼前に笑へ。今日花は水面に飛ぶ。【芝林集】

其五

それ鶏もし犬に逐はるゝ時は、飛で空に騰り、猿もし虎  
 に追はるゝ時は、踊て樹に上る、物みな避くる所あり、只  
 この無常のみありて逃るゝに地なし。【臨在家語】

老人と閻王との問答

◎ 諺に警世の語あり、謂く一老人死して閻王に見へ、王の  
 早く與に信を通せざるを咎む、王の言く、吾信數々な  
 り、汝が目漸く昏し、一の信なり、汝が耳漸く聾す、二の信  
 なり、汝が齒漸く損す、三の信なり、汝が百體日に益々衰  
 ふ、信其幾度なるを知らず、然れどもこれ特に老人の爲



少年と闇王との問答

に言ふのみ、今更に之を續けん、一少年あり、亦王を答て云く、吾目明かに、耳聴く、齒利く、百體強健なり、王胡ぞ信を以て我に及ばざる王の言く、亦信ありて君に及ぼすも、君自ら察せざるのみ、東隣に四五十にして亡する者あるか、信にあらすや、西隣に三二十にして亡する者あるか、更に十歳と咳提乳哺とに及ばずして亡する者あるか、信にあらすや、良馬は鞭影を見て行る、必ず錐膚に入るを俟つ者は驚駭なり、何ぞ嗟くに及ばんや。

【竹窓二筆】

無明と諸悪徳

衆生無始より以來、無明妄りに起りて心相あるを現す、心相既に形はるれば、妄境斯に現はる、妄境既に現はるれば、始て好醜を分つ、好醜既に呈すれば、始て憎愛あり、憎愛既に生ずれば、乃ち去取あり、去取あれば、乃ち善悪あり、既に善悪あれば、乃ち因果あり、是に因て四生九有三界六道熾然として建立せずと云となし、これ則ち事相不無の上に約して説くなり。

【鼓山晩錄】

佛と衆生

觀普賢菩薩行法經に曰く、佛を毗盧舍那徧一切處と名く、其佛の住處を常寂光と名くと、所謂常寂光を略して寂光世界と云ふ、釋迦牟尼佛の淨土なるが故に寂光淨土とも唱ふるなり、悟るときは娑婆即ちこれ寂光なり、迷ふときは、寂光却て娑婆と成る、衆生と佛とも亦復是の如し、悟る時は衆生即ち佛なり、迷ふ時は佛却て衆生となる、衆生となる時は永劫に沈淪し、佛となる時は剎那に解脱す。

【臨在家語】



人心と世路

◎世路に夷險なし、夷險は心より起る。脚跟若し自ら穩かならば、山海坦然として平かならん。【禪餘内集】

難 人生二十の

◎佛の言く、人に二十の難あり、貧窮にして布施すると難し、豪貴にして道を學すると難し、命を棄て、必ず死すと難し、佛經を觀ると得ると難し、生れて佛世に値ふと難し、色を忍び、欲を忍ぶと難し、好を見て求めざると難し、辱かしまれられて嗔らざると難し、勢ありて臨まざると難し、事に觸れて、無心なると難し、廣學博窮なると難し、我慢を除滅すると難し、末學を輕んせざると難し、心行平等なると難し、是非を説かざると難し、善知識に會うと難し、性を見道を學ぶと難し、化度の人に隨ふと難し、境を觀て動かざると難し、善く方便を解くと難し。

無常

【四十二章經】

◎朝榮暮辱共に空と成る。今日の顔は昨日の紅にあら

火宅

◎百年三萬六千霜。盛者必衰、人常ならず。【見桃錄】

無常

◎娑婆の火宅はこれ五濁並び聚るの郷、乃ち五欲奔馳の境なり。【禪餘内集】

無常

◎無常迅速なり、生死事大なり、且つ存命の際だ業を修し

【隨聞記】

人生は幻寄なり

◎人生は幻寄なり、四大堅きに匪ず、百年漏盡きて終に鳥有に歸す、況んや百に満たずして中天する者、滔々として皆是なり。【黃檗清規】



君臣親子夫婦兄弟の干渉

電光石火

③ 前生の佛縁の淺深によりて男女のへだてあるなり、佛縁の深きは男と生れ、佛縁の淺きは女と生る、此を以て過去未來の果報を知るべし、千世縁ありて夫妻となり、五百世縁あつて兄弟となる、三世の機縁深くして君臣師弟となる、君臣師弟の縁は親子兄弟夫妻よりも深き縁なり、現在に親切の心あるは、前生の夫妻親子兄弟なり。

【法燈國師法語】

④ 季百歳と雖も、猶刹那の如く、東に逝くの長波の如く、西に垂るゝの殘照石を撃つ、星火隙を馳るの迅駒、風裡の微燈、草頭の朝露、岸に臨むの朽樹、目を爍かすの電光に似たり、若し正法に遇はずんば、永く幽塗に墜ちん。

【宗鏡錄】

人は鳥類に劣る

生活

人間界の六道

⑤ 天地は何とも思はずして無量の物を生じ、色々の花をも咲き出す、人間は色々の智慧を出して本來をくらます、鳥類畜類に劣るなり。

【天道假名法語】

⑥ 一切の衆生は無明の酒を飲み、五住の地に臥して、長劫に惛然たり、孰か醒めたる者やある。

【宗鏡錄】

⑦ 六道の中に六道あり、且く人を以て之を云はん、人にして天なる者あり、諸の國王大臣の類是なり、人にして人なる者あり、諸の小臣及び平民衣食饒足し、世に處して安然たるの類是なり、人にして修羅なる者あり、諸の獄吏屠兒劊子の類是なり、人にして畜生なる者あり、諸の重きを負ひ、力役して恒に鞭撻を受くる類是なり、人にして餓鬼なる者あり、諸の貧究乞人、飢に啼き寒に號



生滅の身

ぶの類是なり、人にして地獄なる者あり、諸の刑戮剛割せらるゝの類是なり。 【竹窓三筆】

第二節 人身

① 今生の人身は、四大五蘊因縁和合して假に成せり、八苦常にあり、況や刹那々に生滅して更に停らず、況や一彈指の間に六十五の刹那生滅すと雖、自ら味によりて未だ知らざるなり、凡て一日夜が間に六十四億九萬九千九百八十の刹那ありて、五蘊生滅すと雖、知らざるなり、憐むべし、吾生滅すと雖、自ら知らざるなり。

② 斯の如く生滅する人身なり、例ひ惜むとも停らじ、昔よりして停まれる一人未だなし、斯の如く吾にあらざる人身なりと雖、回らして出家受戒するが如きは、三世の

人身と佛果

諸佛の所證なる、阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰の智人か欣求せざらん。 【正法眼藏】

身は空なり

③ 今我身體内外の所有何を以てか本と爲す、身體髮膚は父母に稟く、赤白の二滴始終是空なり、所以に我に非ず、心意識知壽命を繋ぐ出入の一息畢竟如何所以に我に非ず、彼此執るべき無きをや、迷者は之を執り、悟者は之を離る。

【學道用心集】

苦たり惱たり

④ 諸仁者、是の身は無常なり、力なく堅なく、速に朽るの法なり、信すべからず、苦たり、惱たり、衆病の集る所、諸仁者、此の如き身は、明智の怙まざる所なり、是身は聚沫の如し、撮摩すべからず、是身は泡の如し、久しく立つを得ず、



穢充滿す

是身は焰の如し、渴愛より生ず、是身は芭蕉の如し、中に堅あるとなし、此身は幻の如し、顛倒より起る、是身は夢の如し、虚妄の見たり、此身は影の如し、業縁より現す、是身は響の如し、諸の因縁に屬す、是身は浮雲の如し、須臾に變滅す、是身は電の如し、念々に住せず、是身は主なし、地の如しと爲す、是身は我なし、火の如しと爲す、是身は壽なし、風の如しと爲す、是身は人なし、水の如しと爲す、是身實ならず、四大を家と爲す、是身空たり、我我所を離る、是身知なし、草木瓦礫の如し、是身作なし、風力の轉する所なり。

⑤ 是身不淨なり、穢惡充滿す、是身虚偽なり、假に深浴衣食を以てすと雖も、必ず磨滅に歸す、是身災爲たり、百の病

水火相迫る

身は幻なり

惡象

惱あり、是身丘井の如し、老の逼る所となる、是身無常なり、當に死すべきと爲す、是身毒蛇の如し、怨賊の如し、空聚の如し、陰界諸入の共に合成する所なり。【維摩經】

⑥ 昨日は強て走り、今日は病て臥す、形は實に我主に非ず。此中宜く識破すべし、忽然として氷の寒きが如く、忽然として火の逼るが如し、水火變ずると須臾、境縁皆識るべし、乃至形衰て枯木の如く、聲細して暗啞の如し、此識亦昏散すれば、誰をか不死の者と爲さん。【禪餘內集】

⑦ 佛の言く、當に身中の四大を念すべし、各自に名あり、都て我なきものなり、我既になければ、其如幻なるのみ。

⑧ 善男子、譬ば惡象の心未だ調順せず、人あり之に乗に、意

【四十二章經】



に隨て去らず、城邑を遠離して空曠の處に至が如し、善く此五根を攝する能はざる者も亦復是の如し、人を將て遠く涅槃の城邑を離れ、生死曠野の處に至る。

【涅槃經】

⑨ 父母所生の身を反觀するに、猶彼の十方の虚空の中に一微塵を吹が如し、存するが如く、亡するが如し、湛たる巨海に一の浮漚を流すが如く、起滅從ふことなし。

【首楞嚴經】

⑩ 諸仁者、是身は無常なり、力無く、堅と無し、速に朽るの法なり、苦たり、惱たり、衆病の集る所、諸仁者、此の如き身は、明智の者は、怙ざる所、是身は聚沫の如し、攝摩すべからず、乃至、是身は浮雲の如し、須臾に變滅するが故に、是身

浮漚の身

身の惡徳

は電の如し、念々住らず、乃至、是身は不淨なり、穢惡充滿す。

【維摩經】

病惱  
身惡

① 是身は災たり、百一の病惱あり。

② 佛は心なり、地獄は身なり、身の惡を佛にさらせよ、身の

惡消ゆる時、清淨になるなり、身の業の盡果てぬれば、い

さぎよき、心の儘の佛なりけり。

③ 天は身なし、念なし、心なし、是非なし、身あれば八萬四千

の惡念あり、身の爲に苦むと確かなり。

【無難假名法語】

主宰なし

④ 現今汝が寒暖人事を知る處の當念、及供養を發する者

は、頭の頂より足の爪先に至迄、何者有りてか、此思想を發するや、眼耳鼻舌身五臟六腑、皮肉骨髓等の色々あり



と雖此は父母愛欲の縁によりて、地水火風の四大假に  
和合して出生し來るもの、喩ば水上の泡の、風縁に逢て  
生起せるが如し、死して後は、燒ば北邙の灰となり、埋め  
ば曠原の土となる、更に一物の主宰たるものなし。

【供養參】

法身と人身

⑤ 此身は本より法身の體なれども、法身なることを知ら  
ずして我身と思へるは、法身を見かくして、我身と思ひ、  
我身に迷て貪瞋癡煩惱を造り、深く惡道に沈むなり、乃  
至、地水火風本に歸りぬれば、只白骨となりて、露程も我  
身と頼むべきものなし、斯かる淺間敷白骨を我身と思  
ひ、千生萬劫此骸骨に使はれて、地獄の業をのみ造て、三  
途に沈み果るは、愚に淺間敷事に非ずや。

【鐵眼假名法語】

己が醉を知  
らす

⑥ 我身を知ざれば心を以て心に迷へり、譬ば酒に酔ひた  
る者の自ら醉ることを知らずして、酔はざる人を嘲り、長  
夜に眠る者の夢の中に夢を知らずして、ねごとをするに  
似たり、養ひ得ては遂に北邙の露と消え、勞り來りては  
空しく東岱の煙と登る、此身の爲に生ある者の命を斷  
て舌に味ひ、猥しく財寶を貪て衣食の計とす。【妻鏡】  
⑦ 身に善事を好まんより、身を思はねば安し。

【無難假名法語】

身を思はざ  
れ  
身は實ある  
なし

⑥ 我身本來實なし、只父母の縁によりて、四大假に合成す  
るのみなり、四大とは地水火風なり、地大と云ふは髮毛  
爪齒皮肉筋骨垢色なり、水大と云ふは唾涕膿血津液痰



悪業の身

涙大小便利なり、火大と云は、煖氣なり、風大と云は、動する相なり、此四大和合して中に縁する氣あるを慮知の心と名けたり。

【月庵假名法語】

身中の六賊

八萬四千の悪業あるは身なり、水火の責に遇なり、之を思ふは恐敷なり。

【無難假名法語】

衆生の身中

六根あり、各六賊あり、六賊に各三毒あり、所謂貪瞋癡なり、一切の有情の類の中に三毒を具足せざる物なし、三毒を因とし、三悪道を果とす、因果必然たり、我罪なしと云はん人は、此理を知らざる者なり。

【拔隊假名法語】

身は化なり

此身の化なるは夢幻泡影の如し、今日ありと雖、明日までたのみ難し、縦ひ百年の齡を持つとも只昨日の夢の

如草露

如し。此身體は只草葉に結ぶ露の如し、露に本より主なし。

【月庵假名法語】

身は假宿のみ

此身は實に吾に非ず、只假の宿のみ、如何に此假の宿に貪著して、永劫の事を願みざる。

【快馬鞭】

色身と飢渴

心性本來清淨にして、飢たる事なく、渴する事なく、寒熱なく、病なく、恩愛なく、眷屬なく、苦なく、善惡なく、本來一物もなきなり、只色身ありと思ふに依て、飢渴寒熱色々病あり、此色身本來空なりと心得ば、時々起る貪著心は捨らるべし。

【大燈假名法語】

屠所に赴くの身

菩提の道に入らんと思ふ人は、第一に生死無常の速なる理を能々思ひ辨ひ玉ふべし、曉の鳥の音、夕の鐘の聲



身中の四毒蛇

何か我生死を催さる、此身は牛羊の屠所に赴くが如し、歩々死に近かずと云事なし。【大梅山夜話】

⑤ 自ら己身を觀すれば、四毒蛇の如し、是身常に無量の諸蟲に接食さる、所たり、是身臭穢にして貪欲獄縛なり、是身惡むべき事猶死たる狗の如し、是身の不淨なると九孔より常に流る、是身城の如し、血肉筋骨皮を以て其上を裏み、手足は以て敵を却る樓櫓たり、目は察孔たり、頭ば殿堂たり、心王中に處するは是身城の如し、諸佛世尊の棄捨せる所、凡夫愚人は常に味著する所なり、貪淫嗔恚愚癡羅刹其中に止住す、是身堅らざると猶蘆葦伊蘭水沫芭蕉の樹の如し、是身無念にして念々に住せず、猶電光暴水幻燄の如し、亦水に畫くに、隨て畫き、隨て合

善根と身體

人間と四大

するが如し、是身壞し易きと、猶河岸臨峻の大樹の如し、是身久しからずして、狐狼鴟梟鷲鵲鳥鵲餓たる狗の食啖さる、所となるべし、誰か智あらん者の此身を樂しむべき。

⑥ 此人身は容易く受る所にあらず、昔の善根力によりて受け來る所なり。

⑦ 人間も虫も本來は父母なくして生じ、其後段々産み續きたる者なり、皆地火水風の四にもれず、髮毛爪齒皮肉筋肉垢色は地なり、唾涕膿血津液痰淚大小便利は水なり、暖氣は火なり、人々動き働くは風なり、此四大和合して中に縁する氣あるを空理と名くるなり、此四大分散するうちに、水は元の水に歸し、火は元の火に歸して偏

【瑠山傳光錄】

【涅槃經】



人命

身冷へ、風は元の風に歸して、全身動かず、扱又或は焼き  
 或は埋めは本の土に歸るなり、然れども空理は昔より  
 今もかわる事なく、不生不滅なり、此道理を能く辨ふる  
 を成佛と云ふなり。  
 【大道假名法語】

⑤ 吁人命は呼吸の間にあり、佛は無病の人の爲にすら之  
 を云ふ、況や死に垂々として悟らざるは悲かな。  
 【竹窓三筆】

男女貴賤なし

⑥ 世俗を以て之を言は、即ち男女貴賤なり、道を以て之  
 を言は、即ち男女貴賤なし、是を以て天女道を悟るに  
 女形を變せず、車匿眞を解するに寧ろ賤秣を移さんや、  
 此蓋し男女貴賤に非ざるは皆一相に由ればなり。  
 【少室六門】

一切の人即ち佛

⑦ 祖師西來して、直に一切の人全體これ佛なりと指す、汝  
 今識らず、聖を執て外に向ふ、馳進還て心に迷ふ、所以に  
 汝に向て道ふ、即ち心これ佛なり、一念の情生ずれば即ち  
 異趣に墮す、無始より已來、今日に異ならず、異法あるこ  
 となし、故に成等正覺と名く。  
 【傳心法要】

⑧ 八萬四千の毛竅、三百六十の骨節、畢竟して通身是法體  
 なり。  
 【鹽山和泥合水集】

⑨ 汝が身と汝が心とは、皆これ妙明の眞精妙心の中の所  
 現の物なり、云何ぞ汝等本妙圓妙の明心寶明の妙性を  
 遺失して、悟道の明を認むるや。  
 【首楞嚴經】

第三節 人心

⑩ 凡そ人心は山川よりも險し、天を知るよりも難し。



序二

四種の心

②射に臨まずんば、義士の心を知らず、難に臨まずんば、忠臣の志を知らず。

【枕安國語】

③汎く心と言ふは、略して四種あり、梵語各々別に翻譯また異なる、一には純利隨耶、此には肉團心と云ふ、此はこれれ身中五藏の心なり、二には緣慮心なり、此はこれ八識俱に能く自分の境を緣慮するが故に、此八に各々心所あり、中に於て或は唯だ無記、或は善染に通ず、經論の中に目けて心所と爲す、惣て心と名く、謂く善心惡心等なり、三には質多耶、此には集起心と云ふ、唯だ第八識の種子を積集して現行を生起するが故に、四には乾栗隨耶、此には堅實心と云ふ、亦是眞實心と云ふ、此はこれ眞心なり、然れば第八識に別の自體なし、但だこの眞心不覺

眞と頼耶と  
體別なりと  
云ふは惡慧  
なり

を以ての故に、諸の妄想と和合、不和合の義あり、和合の義とは能く染淨を含む、目けて藏識となす、不和合とは體常に變せず、目けて眞如となす、都てこれ如來藏なり、故に楞伽經に云く、寂滅と云ふは名て一心と爲す、一心と云ふは即ち如來藏なり、亦これ在纏の法身なり、勝鬘に説くが如しと、故に知んぬ、四種の心は本同一體なるを、故に密嚴經に云く、佛、如來藏を説て、以て阿頼耶と爲すと、惡慧は知ると能はず、藏は即ち頼耶識なり、如來清淨藏と世間阿頼耶とは金と指環と展轉して差別なきが如し、然も同體なりと雖も、眞妄の義は別に於て、本末また殊なるなり、前の三は相、後の一はこれ性、性に依て相を起す、蓋し因由あり、相を會して性に歸す、所以な



きに非ず、性相無礙、都てこれ一心之に迷へば、觸向面牆、之を悟れば、萬法臨鏡、もし空しく文句を尋ね、胸襟に信せば、この一心の相性に於て如何が了會せん。

【禪源諸詮集】

善悪は縁よ  
り成る

心は人に左  
右せらる

④人の心、本より善悪なし、善悪は縁に隨て起る、喩へば人、發心して山林に入る時は、林下は善し、人間は悪しと覺ゆ、亦退屈の心にて山林を出る時は、山林は悪しと覺ゆ、是即ち決定して心に定相なし、縁に隨て兎も角もなるなり、故に、善縁にあへば心よくなり、悪縁に近けば心悪くなるなり、我心本より悪しと思ふと勿れ、只善縁に隨ふべきなり。

⑤人の心は決定、人の言ばに隨ふと存ず、大論に云く、喩へ

ば、愚人の手に摩尼珠を持するが如し、人は是を見て、汝下劣なり、自ら手に物をもてりと云ふを聞て思はく、珠はおし、名聞は深し、我は下劣ならんと思ふ、思ひ煩ふて猶只名聞に引かれ、人の言ばについて、珠を捨て、他人にとらしめんと思ふほどに、終に珠を失ふと云ひ、人の心は斯の如し、一定此言葉は、我爲によしと思へども、名聞にさへられて、其に順はざるもあり、亦一定我爲に悪きとと思ひながらも、名聞の爲なれば、先づ隨ふ人もあり、悪にも善にも隨ふ時は、心は善悪につるゝなり、故に、いかに固より悪き心なりとも、善知識に隨ひ、良人に馴るれば、自然に心もよくなるなり、悪人に近けば、我心にも初は悪しと思へども、終にその人の心に隨ひ、馴る程に、



興あふいるや心ながら

別べつ心しん意い識しきのく區

覺おほへず懸まて實に悪く成なり。  
亦また人ひとの心は決定けつていして他に物を取らせじと思おもへども他  
人にん強じやうて請ぬれば、悪しと思おもひ嫌ながらも興あるなり、亦また決けつ  
定ぢやうして興へんと思へども便宜べんぎなく、時とき過すぎぬれば、亦や  
むとも有なり、然あれば學がく人にんたとへ道心だうしん無なくとも良人りやうにん  
に近づき、善ぜん緣えんに逢て同じ事を幾度いくたびも聞見みるべきなり、  
この言、一たひき度たび聞きたらば、重かさねて聞べからずと思ふと莫なれ。  
【隨聞記】

⑦ 文殊問經に云く、心は聚の義、意は憶の義、識は現知の義  
と、俱舍論に云く、集起を心と名け、籌量を意と名け、了別  
を識と名くと、密嚴經に云く、藏はこれ心、我を執するを  
意と名く、諸の境界に聚るを識と爲す、是の如き等の説

其二

氣海と丹田

皆小異にして大に同じき者なり。  
【竹窓二筆】  
⑧ 心と云ひ、意と云ひ、識と云ふに三種の別あり、それ識と  
云ふは、今の憎愛是非の心なり、意と云ふは、今冷暖を知  
り、痛痒を覺ゆるなり、心と云ふは、是非を辨へず、痛痒を  
覺へず、増壁の如く、木石の如し、能く實に寂々なりと思  
ふ、此の心、耳目なきが如し、故に心によりて云ふ時、恰も  
木人の如く、鐵漢の如し、眼あれども見ず、耳あれども聞  
かず、茲に至りて、言慮の通すべきなし、是の如くなるは、  
即ちこれ心なりと雖も、此はこれ冷暖を知り、痛痒を覺  
ゆる種子なり、意識これより建立す、是を本心と思ふと  
勿れ。  
【登山傳光錄】  
⑨ 人に氣海丹田あり、氣海は元氣收養の寶所、丹田は神丹



理と性

性と人畜

性と心

を精錬し壽算を保護するの城府なり。【遠羅天釜】

◎人の身に一の性と申物候此性と申は何ぞと云へば天

地の間に一の理と云ふものありと口に書付候へし其

理人の身に請ては性と云ひ變たる物にて候

◎此性も目に見へず形も無けれども人は此性動けば聲

を出し物を云ひ立居萬の所作をし動き働きすると此

性よりなすなり此性は人に限らず鳥禽虫けらまで同

しく請てかはらぬ物なり指の先爪の端まで此性行渡

て有物なり。

◎性と申すを例へて申さば鏡の如くにて候鏡に梅の花

を捧ぐれば梅が映り竹を捧ぐれば竹が映る此の如く

性に何成と向へば向ふ物が移りて則ち心となり向ふ

心と理と氣

人の氣と氣の源

脈

死と氣

物に此性が動くを心と申候天地の間にて理と申す其

理の動くを氣と云ひ人の身に有て性と申候其性の動

くを心と申なり然れば天にありては氣と云ひ人にあ

りては心と云ふと先づ心得らるべく候

◎人の身に氣と申す物心の外にあり是を何ぞと云へば

先づ根本の元氣と申す物に候へその下にありて押し

て見れば常にをどり候氣源是なり此氣のあふぐとふ

いがうの風の如くなり此氣のあふぐに身の血が浪の

立つ如くに一寸づ、前へ運び廻り候是を脈と申すな

り此元氣が絶て動かねば則ち血が凝て停り脈絶て人

死するなり是に依て人の死するを氣を失ふと申すな

り此氣は生れ候時へそのをと申物候此へそのをより



過失の生ずる理由

善氣は悪心は

氣と血と性の干繋

母の氣を子に傳へ候、其氣をへその下に請けとめて置き候、是が夜晝あふぎて血を廻らし、此身生て居申候なり、此元氣つくれば、命絶へ候、此氣が身の内を普く廻り候、此氣が心を乗せて、右へなりとも左へなりとも行くなり、此氣が動て強く過れば、心が此氣に引つられて物を害ひ、手に持たる物を打落し、足に踏む物を踏みはづし、けつまづき、轉びなどするなり、心が氣に従へば、惡し、氣が心に従へば、善し、縦へば、氣は惡人なり、心は善人なり、善人が惡人に引かるれば、惡し、惡人が善人に引かるれば、善し、此氣をよき程にする事、萬の道に善しきなり、此元氣動て血廻り、氣と血と正しければ、性存す、性存すれば、心正し、然れば、心は性より出て、性は血氣の間より

識

意

④ 出で、血氣に乗りて居るものなれば、氣と云ひ、性と云ひ、心と云ふ、様々にかはれども、其源は一なりと知るべし。識と申すは、先づ始の一念なり、赤き物なりとも、白き物なりとも、瞥と見て、赤よ白よと見付たる時の始の一念なり、識と申すなり、識はしるゝと讀申候、瞥と見て、赤白と知た計なり、未だ分別の出ぬ時なり、耳に聞も鼻に嗅ぐも、舌に味ふるも、身に觸るも、同じ心持なり、先づ最初の一に念なり、是より始めて、色々の事起るなり。

⑤ 意と申すは、右に申す識に、分別の出來たを意と申なり、始め、瞥と赤き物を見て、赤と計見たは、初一念識なり、暫く見る内に、分別が生じて、此赤き物は、躑躅か柘榴の花か、いや躑躅の花ぢやと辨へ知る心を、意と申候、見より



情 じやう

起つたも、聞より起つたも、何れも同じ事にて候、此意の心は、當座々々付て出来心にて我身に具りたる、本心をなやまし汚す物なり、此意の心に引かれて、我本心を汚し害ふ物なり、此意の心を我本心と心得候はば、盗人を捕へて我子となしたる如くなり、我本心が此意に引き害はれぬ様にする事肝要なり。

⑥ 情是もこゝろと読み、なさけと讀申なり、此情の字は、時にあたり、月花に向て過にし事を思ひ出で動くを情と申なり、悦びかなしみ、時移事去て悦び悲しみ、共に跡も無なれども、此身に八識と申事の候、此第八識に残り留りて、月花に向ふ時、昔其人のかゝる事を云はれしは、身の一期忘れ難きなど、思ふ事が、我身にかく動出づる

性より起る二種の作用

なり、此動く心を情と申なり。

⑦ 性より起る心に、二の差別あると水の動て浪となるが如く、性動て心となるに、心が二つになるなり、性より生ずる心が性の如くなれば、聖人の心なり、然るを性に背て血氣に従ふ故に、此心悪人の心となるなり、縦へば正路正直なる親の生みたる子が、親には似ずして、隣なる盗人なる心に似るが如し、心は性の子なり、性は直なる物なり、直なる性には似ずして、曲り私なる血氣に従ふなり、性の直なりと云ふは、指を一つ挙げれば、一つと見るなり、五つ挙げれば、五と見るなり、然れば性は正直なり、然るを血氣に従て一を二なりとかすめ、善人を悪と云ふなどするは、皆血氣の私なり。

【澤菴禪師法語】



凡心の種類と自由

心と念起旅客と亭主

人心の六道

⑥ 凡心と云ふは何ぞや、一には是非の心ある凡心なり、一には取捨の念ある凡心なり、一には淨穢の見ある凡心なり、一には聖凡の別ある凡心なり、一には迷悟の分ある凡心なり、若し能く凡心を盡却する時は、海は龍の世界と爲り、空はこれ鶴の家郷なりと謂ふ所なり、何の逍遙ならざる、放曠ならざるとあらんや。 【鼓山晩錄】

⑤ 本心は驛路の亭主の如くならんに、念起の種々なるは旅客の往來の如し、前の客去れば、後の客來る、上下貴賤區々變れども、亭主は如何も變ることなし。

④ それ人々の心と思へる者を、先づ能く細かに考ふべし、或は瞋恚となり、又は愚癡となり、又は貪欲となる、此三毒が善惡と分れて、惡の方に付て凝結れば、嗔は地獄と

六道の境界なりは心の所現

なり、癡は畜生となり、貪は餓鬼となる、善の方に付て凝結れば、嗔は修羅となり、貪は人間となり、癡は天上となる、然れば念起は一なれども、善惡なきにあらず、善惡は二つなれども、三毒なれば即ち六道と分るゝなり。

【自受用三昧】

③ 心は本より自性なきが故に、行爲の業に隨ひ向ふ境界に付て移り行くものなり、物を害し、物を盗み、罪を犯し、法を謗れば、心地獄となり、慳貪邪見なれば、心餓鬼となる、愚痴闇鈍なれば、心畜生となり、偏執我慢なれば、心修羅となる、五戒十善を持てば、心人天となり、他を化度せず、我が自度を求めば、心聲聞緣覺となる、智慧慈悲深ければ、菩薩となり、諸事を悟れば、心佛となる。